

# 平安京左京九条四坊二町跡・烏丸町遺跡

—東九条東山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

平安京左京九条四坊二町跡・烏丸町遺跡

—東九条東山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

株式会社  
イビソク

株式会社 イ ビ ソ ク

# 平安京左京九条四坊二町跡・烏丸町遺跡

—東九条東山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

株式会社 イビソク



## 例　　言

1. 本書は、京都府京都市南区東九条東山王町6・8-2番地に所在する平安京左京九条四条二町跡・烏丸町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、文化財保護法第93条第1項に基づき平成30年1月25日付けで届出された土木工事に伴い、平成30年2月7日に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施した結果、平安京跡に関連する遺構が検出されたため、同課により発掘調査の実施が指示されたものである。〔京都市番号17H558〕
3. 本調査は、ホテル建設工事に伴う事前調査として、株式会社ホテルエムズの委託を受けた株式会社イビソクが実施した。
4. 発掘調査は、解体工事の関係上2回にわたり実施した。1回目が平成30年6月18日～8月21日、2回目が平成30年10月9日～12月10日にかけて実施した。
5. 発掘調査は、京都府教育庁指導部文化財保護課及び京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言の下、株式会社イビソクが実施した。
6. 発掘調査は次の体制で行った。

調査主体 株式会社イビソク

調査員 熊谷洋一、石井明日香

調査補助員 河野美由紀

7. 本報告書の編集は、石井が行った。
8. 本報告書の執筆分担は、以下の通りである。  
第1章 石井、第2章 小池智美、第3章 田中芳樹、第4章 熊谷、第5章 熊谷、田中付論 株式会社パレオ・ラボ
9. 本報告書では、次に示した地図を使用した。  
京都市地形図（1：2500）「京都駅」「梅小路」京都市都市計画局発行
10. 本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供を受けて作成した。
11. 本報告書で示す方位・座標は国土座標第VI系（世界測地系）、水準地は東京湾平均海水面（T.P.）に基づく数値である。
12. 本報告書に掲載した写真は、遺構写真を熊谷が、遺物写真を横山亮（オフィスマガネ）が撮影した。
13. 本報告書作成にあたり、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることが出来た。（敬称略）  
國下多美樹（龍谷大学教授）山田邦和（同志社女子大学教授）以上検証委員  
辻 康男（株式会社パレオ・ラボ）  
公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、株式会社ホテルエムズ
14. 出土遺物については、関連する図面・写真等の記録類と共に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管している。

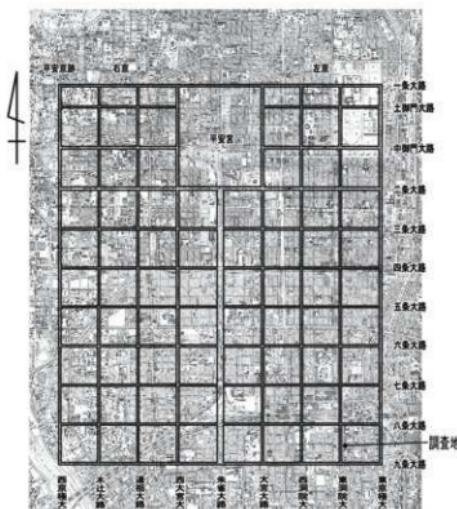
## 凡　例

1. 遺構・遺物写真の縮尺は任意である。
2. 遺構番号は検出順に割り当てた。その後、編集段階で遺構の性格を付与して表記した。
3. 遺構の計測値は、小数点第2位まで表記した。
4. 表で示した出土遺物の計測値は、残存値に〔 〕、復元値に（ ）を付して表現している。
5. 遺物番号は、遺物実測図、観察表、遺物写真図版でそれぞれ対応している。
6. 本報告書で用いた土色は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』を使用した。
7. 出土遺物の年代は、下記の分類・編年を基調とした。
  - ・小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀－』京都編集工房
  - ・中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

第1表 平安京土器型式一年代対応表

平安京												江戸時代		
奈良時代			藤原時代			源町時代			鎌倉時代			江戸時代		
794頃	802頃	900頃	1010頃	790～90頃	1190頃	1229頃	1300頃	1440頃	1500頃	1580～90頃	1660頃	1700年代頃	1820年代頃	1850年代頃
京都 I	京都 II	京都 III	京都 IV	京都 V	京都 VI	京都 VII	京都 VIII	京都 IX	京都 X	京都 XI	京都 XII	京都 XIII	京都 XIV	
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

(小森 2005に基づいて作成)



第1図 平安京復元図と調査地の位置

## 目 次

第1章 調査の経緯.....	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第2章 位置と環境.....	3
第3章 遺構.....	6
第1節 基本土層	
第2節 遺構の概要	
第3節 遺構	
第4章 遺物.....	21
第1節 遺物の概要	
第2節 第Ⅰ期の出土遺物	
第3節 第Ⅱ期の出土遺物	
第4節 第Ⅲ期の出土遺物	
第5節 瓦類	
第6節 包含層	
第5章 まとめ.....	30
第1節 第Ⅰ期（宅地利用以前の10世紀～11世紀半頃）	
第2節 第Ⅱ期（宅地としての土地利用期の11世紀後半～13世紀前半頃）	
第3節 第Ⅲ期（宅地廃絶後の13世紀後半～14世紀頃）	
第4節 第Ⅳ期（18世紀以降）	
第5節 瓦器について	
第6節 結び	
付論 自然科学分析.....	35
第1節 放射性炭素年代測定	
第2節 プラント・オパール分析	
第3節 羽釜埋納遺構3031から出土した羽釜内堆積物の内容物	
第4節 樹種同定	
第5節 土師器付着物の材質分析	
第6節 出土土器付着の赤色顔料の蛍光X線分析	

## 挿 図 目 次

第1図 平安京復元図と調査地の位置	
第2図 調査地位置図（縮尺1/2,500）	1
第3図 調査区配置図（縮尺1/500）	2
第4図 周辺調査位置図（縮尺1/5,000）	3
第5図 調査区西壁・北壁壁面図（縮尺1/50）	7
第6図 第Ⅰ期全体平面図（縮尺1/150）	8
第7図 第Ⅱ期全体平面図（縮尺1/100）	9
第8図 第Ⅲ期全体平面図（縮尺1/100）	10
第9図 第Ⅳ期全体平面図（縮尺1/100）	11
第10図 ベルト1・2（縮尺1/50）	17
第11図 第Ⅲ期遺構図1（縮尺1/40、1/30、1/20）	18
第12図 第Ⅲ期遺構図2（縮尺1/50）	19
第13図 第Ⅲ期遺構図3（縮尺1/60、1/50）	20
第14図 第Ⅰ期出土遺物実測図（縮尺1/4、1/2）	23
第15図 第Ⅱ期出土遺物実測図（縮尺1/4）	24
第16図 第Ⅲ期出土遺物実測図（縮尺1/4）	26
第17図 出土瓦実測図（縮尺1/3）	28
第18図 包含層出土遺物実測図（縮尺1/4）	29
第19図 自然流路断面模式図（縮尺1/50）	30
第20図 土地区画関連遺構比較図（縮尺1/400）	31
第21図 グリッド毎の瓦器出土数（縮尺1/400）	32
第22図 曆年較正結果	35
第23図 調査区内の堆積模式柱状断面図	36
第24図 植物珪酸体分布図	36
第25図 植物珪酸体写真	40
第26図 羽釜埋納遺構3031から出土した炭化種実	42
第27図 平安京左京九条四坊二町跡・烏丸町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真	44
第28図 付着物の赤外分光スペクトル図	46
第29図 土師器と付着物の実態顕微鏡写真	48
第30図 分析Na2の付着物の断面とその元素マッピング図	49
第31図 赤色顔料の蛍光X線分析結果	51
第32図 赤色顔料付着状況（○は試料採取位置）および採取赤色顔料の生物顕微鏡写真	52

## 表 目 次

第1表 平安京土器型式一年代対応表	
第2表 周辺発掘調査一覧	4
第3表 周辺試掘・立会調査一覧	4
第4表 遺構概要表	6
第5表 遺物概要表	21
第6表 瓦器の年代と产地	33
第7表 測定試料および処理	35
第8表 花粉分析試料一覧	35
第9表 分析試料一覧	35
第10表 試料1g当たりのプラント・オバール個数	38
第11表 烏丸町遺跡から出土した炭化種実	41
第12表 出土木製品の樹種同定結果	43
第13表 分析試料とその詳細	45
第14表 生漆の赤外吸収位置とその強度	45
第15表 出土遺物観察表	53

## 図 版 目 次

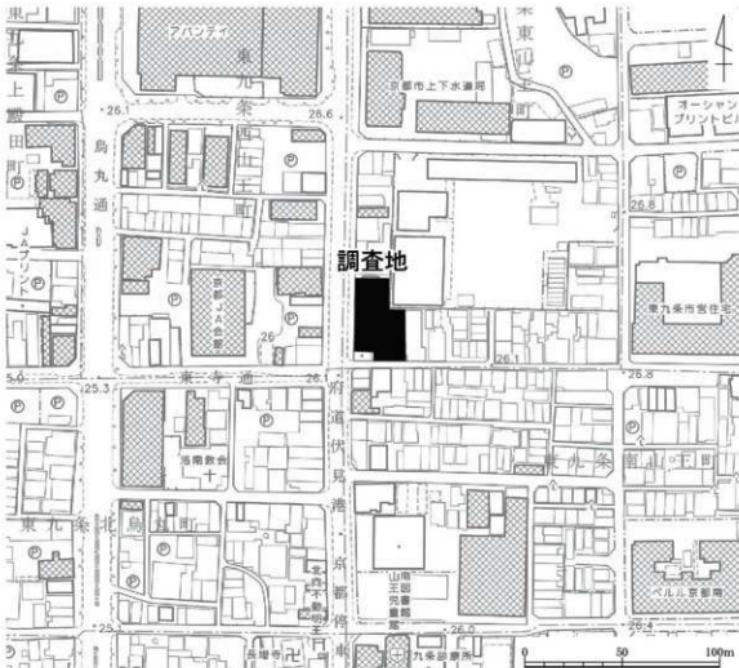
図版一	1. 自然流路3002完掘 (南から) 2. 自然流路3002完掘 (北から)
図版二	1. 自然流路 3002、撓み 3078 完掘後全景 (南から) 2. 自然流路 3002 骸骨出土状況 (北西から) 3. 撥み 3078 完掘 (西から)
図版三	1. 第II及びIII期全景 (南から) 2. 第II及びIII期全景 (北から)
図版四	1. 硬化面 3005 検出 (南から) 2. 硬化面 3005・溝 2001 検出 (南から) 3. 硬化面 3005 完掘及びピット列 (南から) 4. 溝 3003 完掘 (南から)
図版五	1. 溝 3003 (1区) 完掘 (北から) 2. 溝 3003 (2区) 完掘 (南から) 3. 硬化面 2005 完掘 (南から) 4. ピット 2016 (南から)

5. 磐石 3027 (南から)  
6. 磐石 3028 (西から)
- 図版六 1. 繼敷き 3039、3040 検出 (北から)  
2. 集石 1008 検出 (南から)  
3. 土坑 3052 箱状木質検出 (西から)  
4. 土坑 3053 完掘 (南から)  
5. 土坑 3060 總・遺物出土状況 (北から)  
6. 土坑 3060 完掘 (東から)  
7. 土坑 3060 北壁側板検出 (南東から)
- 図版七 1. 土器窯 3001 遺物出土状況 (東から)  
2. 土器窯 3001 下層遺物出土状況 (西から)  
3. 羽釜埋納遺構 3031 遺物出土状況 (東から)  
4. 羽釜埋納遺構 3031 断面 (東から)  
5. 土器窯 3001、羽釜埋納遺構 3031 (北から)  
6. 土取り坑 2010 完掘 (南西から)  
7. 近世溝断面 (南から)  
8. 第IV期全景 (南から)
- 図版八 1. ベルト 1 断面西 (南から)  
2. ベルト 1 断面東 (南から)  
3. ベルト 2 断面 (南から)  
4. ベルト 2 断面西 (南から)  
5. ベルト 2 断面中央 (南から)  
6. ベルト 2 断面東 (南から)
- 図版九 1. 出土遺物 1
- 図版十 1. 出土遺物 2
- 図版十一 1. 出土遺物 3
- 図版十二 1. 出土遺物 4
- 図版十三 1. 第II期出土の瓦器 (左: 西一行北七門、右: 西一行北八門)  
2. 第IV期出土の陶磁器

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

本調査は、ホテル建設に伴う発掘調査である。調査地は、京都市南区東九条東山王町6・8-2番地に所在する、平安京跡（遺跡番号1）・烏丸町遺跡（遺跡番号759）である。当該地において株式会社ホテルエムズによりホテルが建設されることになり、株式会社ホテルエムズより京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）へ、平成30年1月25日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出を行った。京都市文化財保護課はこれを受け、平成30年2月7日に試掘調査を実施したところ、当該地に平安時代以降の遺構が残存していることが確認された（受付番号17H558）。そのため京都市文化財保護課から発掘調査の指導があり、調査については、株式会社ホテルエムズから発掘調査の委託を受けた株式会社イビソクが実施することになった。株式会社イビソクは、文化財保護法第92条に基づき京都府教育委員会に平成30年6月4日付で埋蔵文化財発掘調査の届出をし、許可されたので平成30年6月18日より調査を開始した。



第2図 調査位置図（縮尺1/2,500）

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、平成30年6月18日から8月21日、平成30年10月9日から平成30年12月10日まで実施した。京都市文化財保護課の指導・監督の下、試掘調査の結果に基づいて調査区域を設定し（第3図）、調査区は発掘指導面積の形状と既設建物解体工事の順により1区、2区を設定した。1区は $16\text{ m} \times 11\text{ m}$ （176 m<sup>2</sup>）、2区は $16.5\text{ m} \times 11\text{ m}$ （181.5 m<sup>2</sup>）を測り、両区とも土置き場の関係上反転調査を行った。調査は1区から始め、以下の手順で調査を進めた。

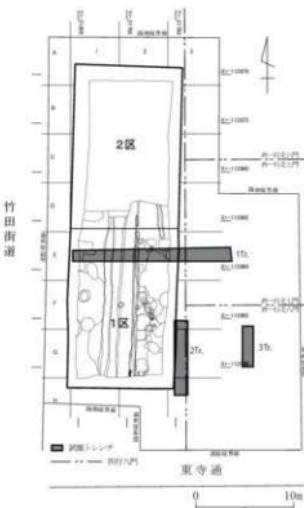
最初はバックホウによる機械掘削として近世以降の堆積層の除去作業を行った。機械掘削と平行して、搅乱の除去と土層の堆積状況を確認した。機械掘削後は、遺構検出面を精査して遺構検出を行った。

試掘調査の結果を踏まえつつ、1面またはそれ以上の遺構面も想定して調査し、特に良好に残存していると予想された中世面の調査を十分に行えるよう工程を組み進めていった。調査面毎の年代は土層観察と出土遺物を根拠とし、第1遺構面は鎌倉時代後期～室町時代前期、第2遺構面は平安時代後期～鎌倉時代前期として調査した。この間、それぞれの遺構面の検出時、完掘時には、京都市文化財保護課の検査を受けた。

遺構検出と平行して、遺構配置図（略測図）を作成し、遺構の配置や重複する遺構の先後関係などの把握に努めた。遺構の記録作業は、土層断面図などを手実測で行い、必要に応じてトータルステーションやポールによる垂直写真を用いて遺構平面測量を行い図化した。また各遺構の情報（種類、位置、成果等）および作業状況を記述した台帳を作成した。なお遺構の位置関係と遺物の取り上げのために調査区に合わせて東西方向に西から東へAからD、南北方向に南から北へ1から5までの5mグリッドを設定した。

遺構土層断面図と遺物実測図は、デジタルトレースを行い、現場計測図面と合わせて編集を行なった。編集に伴って、各遺構を検討し、遺構の性格を判断していった。

出土した遺物は、洗浄、注記、接合のちにランク分けを行い、実測対象遺物を抽出した。報告書掲載遺物は、掲載順にコンテナに収納し、非掲載遺物は、遺構番号順にコンテナに収納した。



第3図 調査区配図図（縮尺1/500）

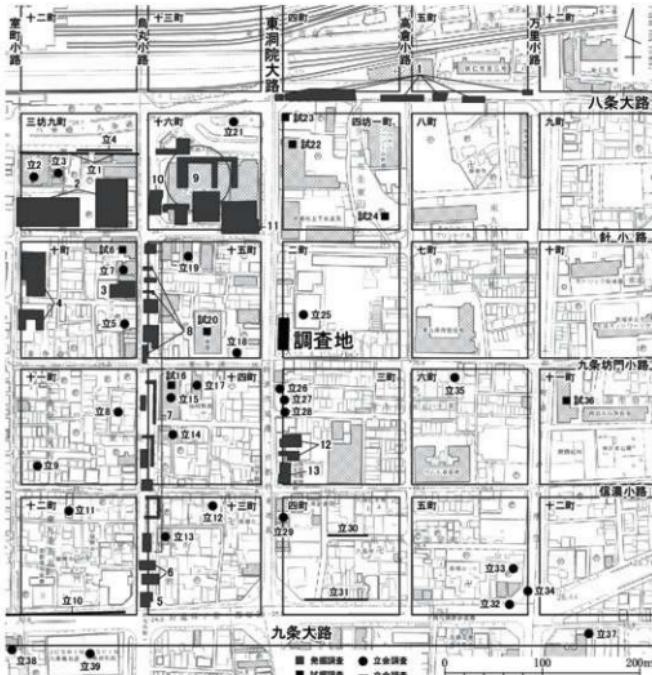
## 第2章 位置と環境

調査地は、京都駅の南東約400mに位置し、竹田街道の東側に接する。

当地は、弥生時代から古墳時代までの集落跡である烏丸町遺跡の東寄りに位置する。周辺調査において、弥生時代から古墳時代の遺物包含層や流路が検出されている。

平安京の条坊では、左京九条四坊二町に当たる。この町は特定の建物などに比定されていないが、周辺には藤原信長の「九条亭」、藤原長実が創建したとされる「弘誓院」、藤原実行邸等、平安時代中期から後期にかけて藤原氏に関わる邸宅、関係社寺が存在した。とりわけ九条兼実の「九条第」、皇嘉門院藤原聖子の「九条殿」、藤原頼輔の「九条邸」の邸宅が存在した。中世には東九条荘と呼ばれる九条家の荘園が存在しており、九条家との関わりが強い土地であった。周辺の調査では平安時代後期以降の道路側溝、路面など条坊に関わる遺構が各所で確認されており、調査地の南側では東洞院大路の東側溝が検出されている。今回の調査でも、この側溝の延長部が想定された。

中世以降は農村化が進み、豊臣期には御土居により洛中と切り離され一層農村化した。



第4図 周辺調査位置図（縮尺1/5,000）

第2表 周辺発掘調査一覧

番号	遺跡名	概要	文献
1	八条四坊四・五町	平安時代末～室町時代の東洞院大路・東側溝。墓地内溝、八条大路北側溝	『平安京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所監修調査報告 2006-20 [財] 京都市埋蔵文化財研究所、2007年
2	九条三坊九町	平安時代後期～鎌倉時代前期の八条院御周辺の館に付属する物流施設もしくは宿所。	『平安京左京九条三坊九町・馬丸町遺跡』現地説明会資料 (公益財団法人 元興寺文化財研究所、2017年)
3	九条三坊十町	平安時代中期～中期の建物・池・溝・土坑、鎌倉時代～室町時代の建物・池・井戸・土坑	『平安京左京九条三坊十町』(古代文化調査会、2006年)
4	九条三坊十町	平安時代前期～後期の道路。平安時代末期～鎌倉時代の建物群	『平安京左京九条三坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-15 [財] 京都市埋蔵文化財研究所、2015年
5	九条三坊十三町	平安時代後期の烏丸小路踏面・更側溝、鎌倉時代の井戸、室町時代後期～桃山時代前半の溝・柱穴、平安時代後期の整地層	『左京九条三坊(1)』(『昭和 56 年度京都市埋蔵文化財概要』[財] 京都市埋蔵文化財研究所、1985年)
6	九条三坊十三町	平安時代後期の烏丸小路踏面・側溝、室町時代後期の溝	『左京九条三坊(2)』(『昭和 56 年度京都市埋蔵文化財概要』[財] 京都市埋蔵文化財研究所、1985年)
7	九条三坊十三町	平安時代後期～鎌倉時代前期の九条院門小路北側溝、烏丸小路東側溝、平安時代中期の土坑。平安時代後期～鎌倉時代前期の土坑・柱穴・落ち込み	『平安京左京九条三坊』(『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財概要』[財] 京都市埋蔵文化財研究所、1988年)
8	九条三坊十五町	調文時代初期の土器・石器出土、弥生時代の溝。平安時代前期の井戸・土坑・溝	『平安京左京九条三坊』(『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財概要』[財] 京都市埋蔵文化財研究所、1987年)
9	九条三坊十六町	鎌倉時代の井戸・土坑・柱穴、平安時代後～室町時代の井戸、室町時代初期の建物・柱穴・溝・樋・壁・土坑	『平安京左京九条三坊跡』京都駅西口第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財調査報告 昭和 54 年度 ([財] 京都市埋蔵文化財研究所、1980年)
10	九条三坊十六町	平安時代後期～室町時代前期の井戸・土坑・柱穴・樋	『左京九条三坊』(『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』[財] 京都市埋蔵文化財研究所、1982年)
11	九条三坊十六町	平安時代後～室町時代の井戸・土坑・柱穴	『平安京左京九条三坊十六町』(昭和 54 年度 京都市埋蔵文化財調査概要) ([財] 京都市埋蔵文化財研究所、2011年)
12	九条四坊三町	平安時代後期の東洞院大路東側溝・建物跡・井戸・室町時代の井戸・土坑	『京都市編「史料京都の歴史」第二章 考古・平仏社、昭和五八年』
13	九条四坊三町	平安時代後期～鎌倉時代前期の溝底部(東洞院大路東側)及び内溝(信玄小路北側)・井戸・土坑・ピット	『平安京左京九条四坊三町跡・馬丸町遺跡』(株)イビヅク 鎌倉時代後期～室町時代前期の土取り坑

※番号は、第4回 周辺調査位置図の番号と対応する。

第3表 周辺試掘・立会調査一覧

番号	遺跡名	概要	文献
立1	九条三坊九町	平安時代後期～末期の落ち込み、鎌倉時代～江戸時代の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 6 年度』(京都市文化観光局、1995年)
立2	九条三坊九町	平安時代中期の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成 2 年度』(京都市文化観光局、1991年)
立3	九条三坊九町	鎌倉時代末期～室町時代初期の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 14 年度』(京都市文化市民局、2003年)
立4	九条三坊九町	平安時代後～末の落ち込み。鎌倉時代～江戸時代の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 6 年度』(京都市文化観光局、1995年)
立5	九条三坊十町	鎌倉時代の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 60 年度』(京都市文化観光局、1985年)
試6	九条三坊十町	室町時代前期の土坑墓・土坑・南北溝・柱穴	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 11 年度』(京都市文化市民局、2000年)
立7	九条三坊十町	平安時代中期の遺物包含層、鎌倉時代前期～後期の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 16 年度』(京都市文化市民局、2005年)
立8	九条三坊十一町	鎌倉時代の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 60 年度』(京都市文化観光局、1985年)
試9	九条三坊十一町	河川氾濫層	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 16 年度』(京都市文化市民局、2005年)
立10	九条三坊十二町	室町時代の井戸	『左京九条三・四町』(『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財概要』[財] 京都市埋蔵文化財研究所、1988年)
立11	九条三坊十二町	平安時代後期の落ち込み・遺物包含層、室町・江戸時代の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成 9 年度』(京都市文化市民局、1998年)
立12	九条三坊十三町	平安時代～室町時代の遺物包含層・土坑・弥生土器	『京都市内遺跡立会調査概報 昭和 57 年度』(京都市文化観光局、1983年)
立13	九条三坊十三町	平安時代後～鎌倉時代の落ち込み・遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 8 年度』(京都市文化市民局、1997年)
立14	九条三坊十四町	室町時代の遺物包含層・時期不明の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 62 年度』(京都市文化観光局、1988年)

番号	遺跡名	概要	文献
立 15	九条三坊十四町	平安時代後期の埋地堆積	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 22 年度』(京都市文化市民局、2011 年)
試 16	九条三坊十四町	縹倉時代の埋地堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 59 年度』(京都市文化市民局、1985 年)
立 17	九条三坊十四町	縹倉・室町時代の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 7 年度』(京都市文化市民局、1996 年)
立 18	九条三坊十五町	平安時代末期の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 56 年度』(京都市文化観光局、1982 年)
立 19	九条三坊十五町	平安時代後期～縹倉時代の土坑。縹倉時代の落ち込み。時 期不明の柱穴	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 13 年度』(京都市文化市民局、2001 年)
試 20	九条三坊十五町	近世耕作土。洪水堆積層、中世の包含層	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 28 年度』(京都市文化市民局、2017 年)
立 21	九条三坊十六町	平安時代～室町時代の遺物包含層	『平安京左京八条大路跡 八条通地下横断歩道建設に伴う立会調査概報 昭和 55 年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1981 年)
試 22	九条四坊一町	河川堆積層	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 28 年度』(京都市文化市民局、2017 年)
試 23	九条四坊一町	平安時代末期～縹倉時代の東洞院大路東側側溝	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 30 年度』(京都市文化市民局、2019 年)
試 24	九条四坊一町	近代盛土以下。自然段落	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 30 年度』(京都市文化市民局、2019 年)
立 25	九条四坊二町	江戸時代の土取り坑跡。平安時代～江戸時代にかけての遺 物が出土	『平安京左京九条四坊』(昭和 61 年度京都市埋蔵文化財調査 概報)〔財〕京都市埋蔵文化財研究所、1987 年)
立 26	九条四坊三町	中世の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 17 年度』(京都市文化観 光局、2006 年)
立 27	九条四坊三町	中世の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 20 年度』(京都市文化観 光局、2009 年)
立 28	九条四坊三町	平安時代後期の土坑。室町時代前期の遺物包含層。下層は 縹倉時代の埋地堆積	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』(京都市文化観 光局、1998 年)
立 29	九条四坊四町	縹倉時代の遺物包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 13 年度』(京都市文化市民 局、2002 年)
立 30	九条四坊四町	平安時代後期の落ち込み	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 23 年度』(京都市文 化市民局、2012 年)
立 31	九条四坊四町	弥生時代～古墳時代・平安時代後期の遺物包含層。縹倉時代 後期～室町時代の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成 10 年度』(京都市文化 市民局、1999 年)
立 32	九条四坊五町	平安時代中期～室町時代の遺物包含層・土坑。縹倉時代 の横状堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成 56 年度』(京都市文 化市民局、1986 年)
立 33	九条四坊五町	岡上	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成 3 年度(京都市文 化市民局、平成 4 年)
立 34	九条四坊五町	縹倉時代の包含層、落ち込み	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成 4 年度(京都市文 化市民局、平成 5 年)
立 35	九条四坊六町	室町時代の包含層。縹倉時代の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 61 年度(京都市文 化観光局、1987 年)
試 36	九条四坊十一町	江戸時代の構造。室町時代の沼掘層	『平安京左京九条四坊』(平成 11 年度京都市埋蔵文化財調 査概報)〔財〕京都市埋蔵文化財研究所、2002 年)
立 37	九条四坊十二町	縹倉時代～室町時代の遺物包含層・土坑	『平安京左京九条四坊』(昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査 概報)〔財〕京都市埋蔵文化財研究所、1985 年)
立 38	九条大路	室町時代の遺物包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 61 年度』(京都市文 化観光局、1987 年)
立 39	九条大路	縹倉時代～室町時代の土坑。下層に流れ堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 63 年度』(京都市文 化観光局、1989 年)

※番号は、第 4 図 周辺調査位置図の番号と対応する。

## 第3章 遺構

### 第1節 基本土層（第5図）

調査地の現況は、ほぼ平坦で、標高 25.9 m～26.1 mである。基本土層は、大きく3層に大別できる。第1層は、現代の盛土層で約70cmの厚さで堆積する。第2層は、近世の耕作土で約10～30cmの厚さで堆積する。第3層は地山である。今回の調査では、江戸時代以前の整地層は確認することができなかった。よって地山上面で遺構検出を行った。地山層は、黄灰褐色土である。調査区中央を南北に走る自然流路を確認している。自然流路の堆積層は、2層に大別できる。第1層は、人為的に埋め立てられた層で、褐色泥砂層から構成され約20cmの厚さで堆積する。第2層は、自然堆積層と見られるが、土師器等の遺物や木片を含む青灰色粘質土である。約30cmの厚さで堆積する。

### 第2節 遺構の概要

今回の調査では、地山上面での1面調査であった。平安時代後期～中世までの約90基の遺構を検出した。遺構の検出状況および出土遺物から第I期～第IV期の4時期にわたる。

第I期は、都市開発の前段階で、自然流路が埋没する時期である。平安時代中期と考えられる。

第II期は、東洞院大路面遺構と思われる硬化面やその東側側溝と考えらえる溝、土坑、ピット等を検出した。平安時代後期～鎌倉時代前期と考えられる。

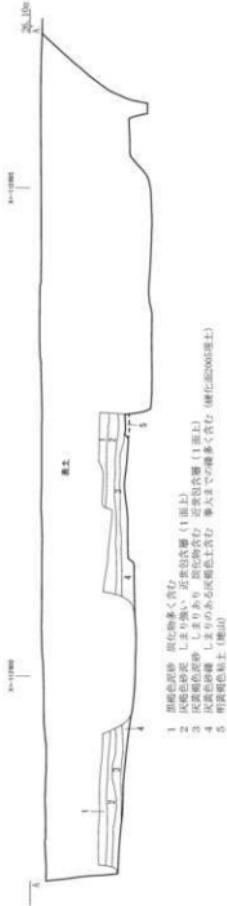
第III期は、土取り坑、土器溜り、土坑等である。土地利用に大きな変化が見られる鎌倉時代後期から室町時代の遺構と考えられる。

第IV期は、南北に延びる暗渠と考えられる溝群である。18世紀を中心とした近世の耕作溝と考えられる。

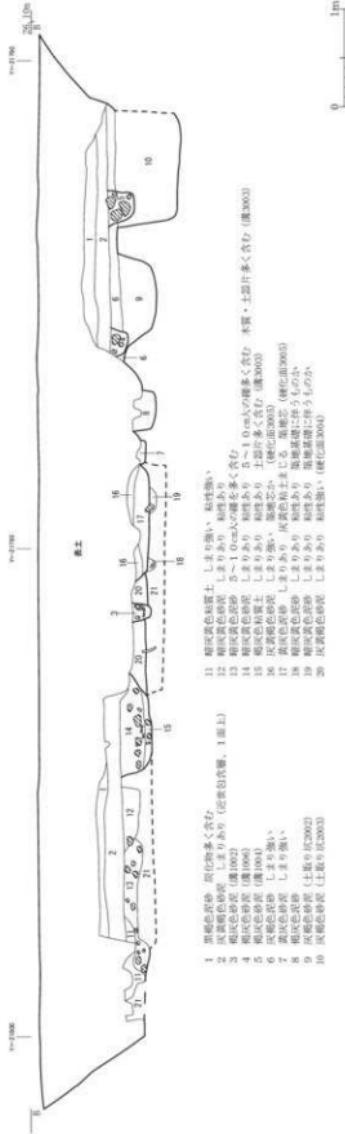
第4表 遺構概要表

時代	時期	主な遺構
第I期 平安時代中期～後期	10～11世紀後半	自然流路 3002 掩み 3078
第II期 平安時代後期～鎌倉時代前期	11世紀後半～13世紀前半	硬化面 3005、3004、2005、 溝 2001、3003 ピット 2016 礎石 3027、3028
第III期 鎌倉時代後期～室町時代	13世紀後半～14世紀	礎敷き 3039、3040 集石 1018 土坑 2012、3052、3053、3060 土器溜 3001 羽釜埋納遺構 3031 ピット列 溝 2004 土取り坑 2002・2003、2010
第IV期 近世	18世紀	溝 1001～1007、1009～1011

調査区西壁



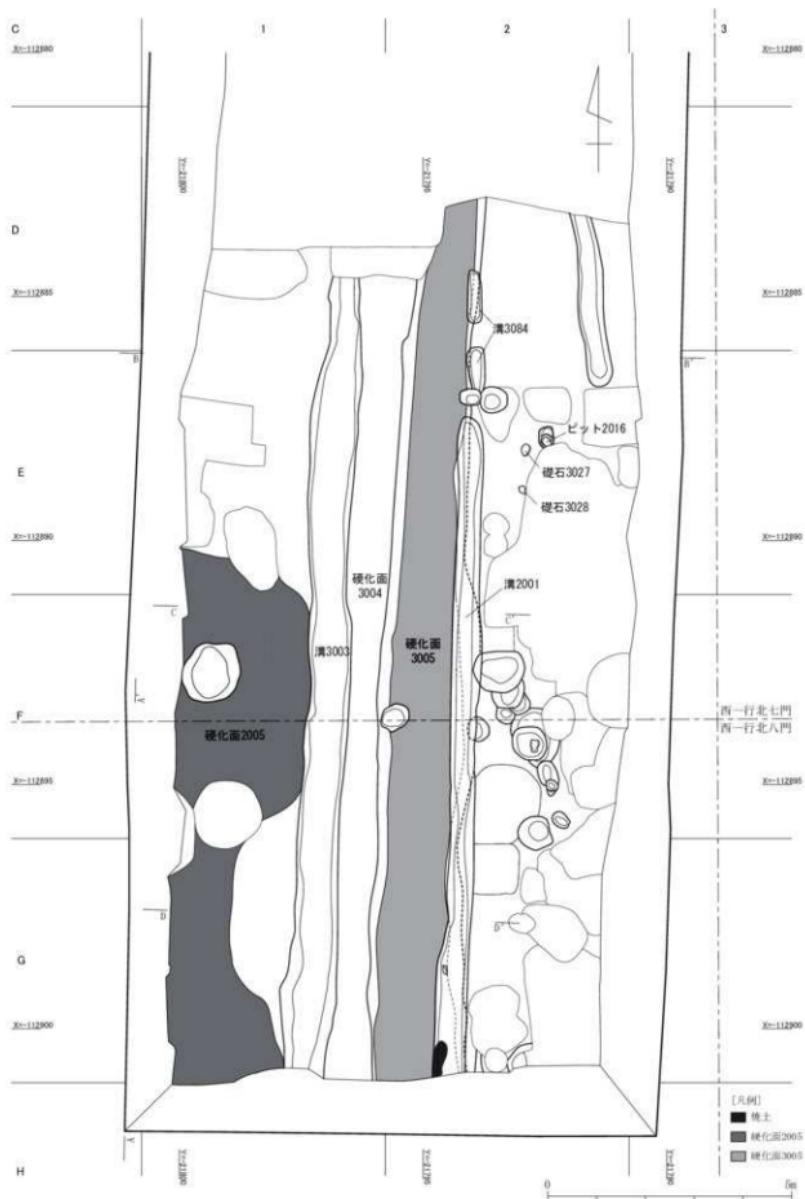
調査区北壁



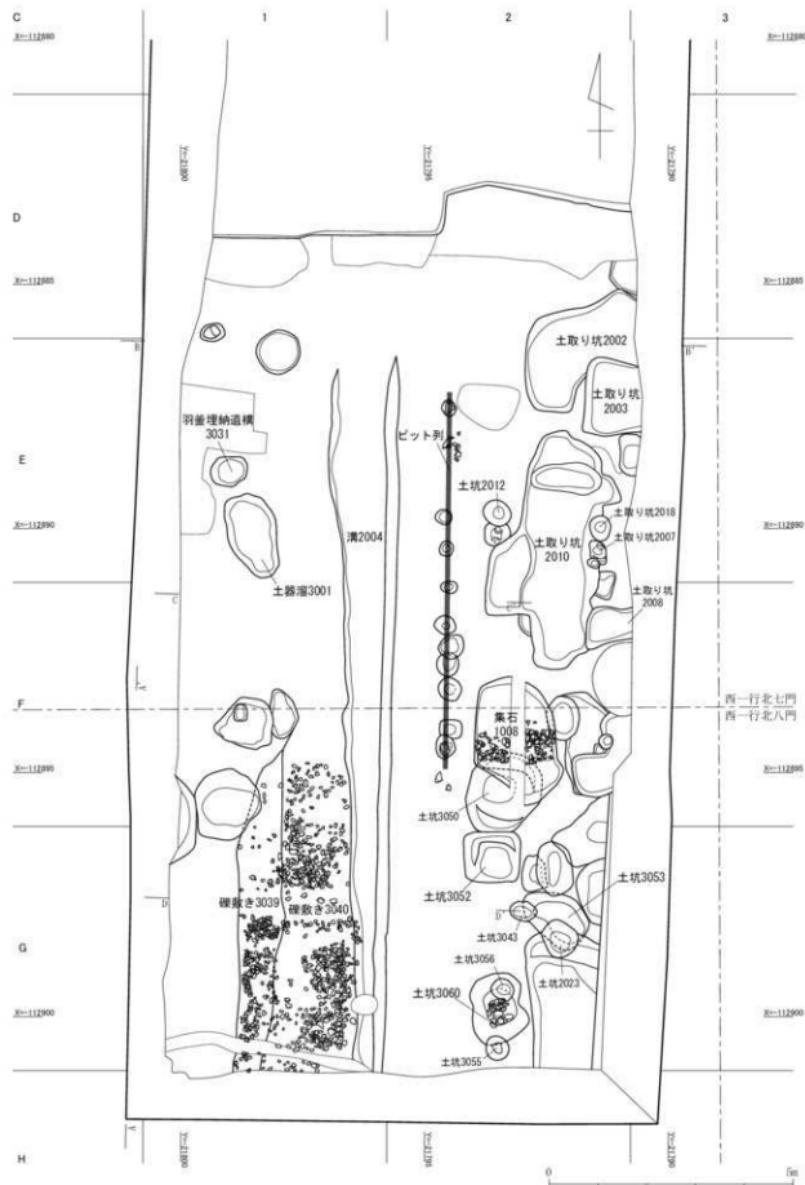
第5図 調査区西壁・北壁壁面図 (縮尺 1/50)



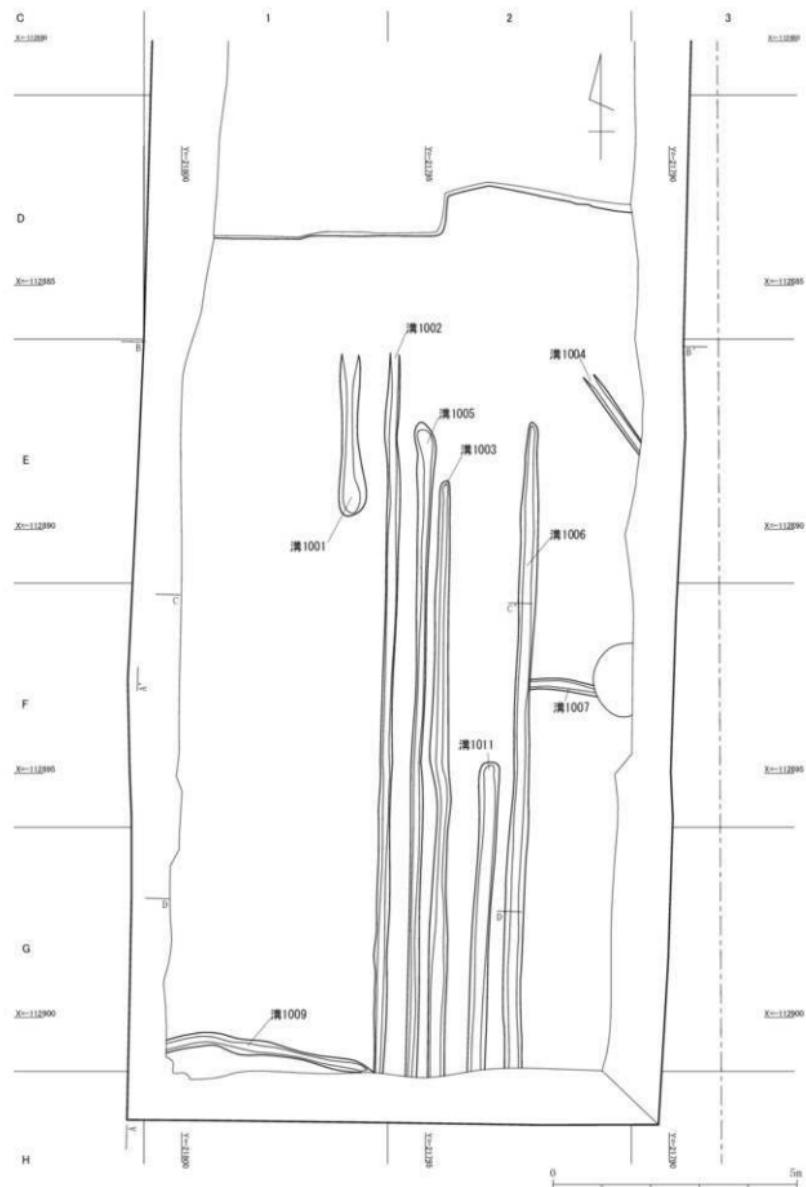
第6図 第Ⅰ期全体平面図（縮尺1/150）



第7図 第II期全体平面図（縮尺1/100）



第8図 第III期全体平面図（縮尺 1/100）



第9図 第IV期全体平面図（縮尺1/100）

### 第3節 遺構

#### 1. 第Ⅰ期（第6図）

第Ⅰ期は、左京九条城の土地利用がほとんどされていないと考えられている10世紀～11世紀中頃の自然流路を検出した。

##### 自然流路 3002（第6、10図、図版一・二）

調査区のほぼ中央を幅約5.5～6mで南北方向に走る流路である。深さ約30cmを測る。覆土は均一な青灰色粘質土である。土層が均一であることや植物遺体と考えられる円形状のマンガン斑が多量に含まれる状況から自然堆積層と判断した。第2層の自然堆積層からも遺物が多く出土している。出土した遺物の多くは、11世紀後半～12世紀中頃（京都V期）のものが中心であるが、これに混じって10世紀（京都II～III期）の土師器皿が出土している。また、この層からは、獸骨や木製品も出土している。出土した遺物から10世紀頃には、流路は存在していたものと考えられる。第1層は、人為的な盛土層でありこの上面から遺構を検出している。土層の堆積状況から10世紀～12世紀中頃までは、緩やかに自然堆積によって埋没し、12世紀後半になると当該地の開発が始まり、人為的に埋められたものと考えられる。

##### 撓み 3078（第6図、図版二）

D1グリッドに位置する。撓み3078、3071、3070、3080は、調査当時は方形のプランを持つ土坑として調査を行った。しかし断面形状が皿状を呈していることや個々の遺構の埋土が均一で繋がってしまうこと、自然流路3002の延長線上にあることなどから遺構ではなく撓みと判断した。全体を通してみると平面形状は不整形で、東西に4.2m、南北に2.6～3.8m、深さ15～20cmを測る。自然流路3002と同様に、撓み3078の覆土からも土師器の皿等の遺物が出土している。これは整地する際に混入したものと考えられる。

撓みから出土した遺物は、11世紀後半～12世紀後半（京都V期）のものであった。

#### 2. 第Ⅱ期（第7図、図版三）

第Ⅱ期の遺構は、東洞院大路路面と考えられる硬化面、その東側側溝、築地芯と考えられる硬化面等土地区分に関連する遺構を検出した。建物に関連する遺構としては、礎石と思われる礎やピットを検出したが大部分を後世の土取り坑等の遺構によって失われていたため明確に建物を復元することはできなかった。

##### 硬化面 3005（第7・10図 図版四）

硬化面3005は、D2～G2グリッドで見られた、幅1.2～2mで南北方向に延びる面である。南は、調査区外へと延びる。硬化面上には、約2～3cm程度の礎が詰め込まれた状況も見られた。硬化面を断ち割って断面を観察すると、3層の硬く締まった層が見られる。第10図ベルト1の7～9層、ベルト2の10、12、12a層がこの築地基底部を構成する地業層とみられる。1978年度（東洞院大路東側側溝として報告されている）2017年度に発掘された築地基底部とほぼ同一線上に位置する。（第20図参照）この状況から硬化面3005は、築地基底部の可能性が考えられる。

硬化面3005は、出土した遺物から12世紀前半～後半（京都V期中～新）と考えられる。

#### 硬化面 3004（第 7、10 図）

硬化面 3004 は、D 1～G 1 グリッドで見られた幅 1 m 前後の南北方向に延びる面である。南は調査区外へと延びる。硬化面を断ち割って断面を観察するベルト 1 の 10 層、ベルト 2 の 9 層がこれにあたる。土層は、硬く締まった状況が見られた。硬化面 3004 は、築地基底部とした硬化面 3005 と東洞院大路の東側側溝と思われる溝 3003 の間に位置する。位置関係からは、側溝と築地等の構の間に設けられた走りも含めた空閑地であった可能性も考えられる。

出土した遺物から硬化面 3004 は、12 世紀前半～後半（京都 V 期中～新）と考えられる。

#### 溝 2001（第 7 図、図版三）

溝 2001 は、D～G 1・2 グリッドにおいて検出した、南北方向に走る溝である。幅 59 cm、深さ 10 cm を測る。またこの延長線上には境乱等により一部途切れてはいるが、北方向の延長線上に平面形状が溝状を呈する溝 3084 を検出している。方向性が一致することから溝 3084 は、溝 2001 と同一遺構と考えられる。また、溝 2001 は、築地基底部とした硬化面 3005 の東側に位置し、方向性が一致していることから築地の内溝である可能性が考えられる。

出土遺物は、小片であるため図示していないが、溝 2001 は 12 世紀前半～後半（京都 V 期中～新）と考えられる。

#### 溝 3003（第 7 図、図版三・四）

溝 3003 は、D 1～G 1 グリッドで検出した南北方向に走る溝状遺構である。硬化面 3005 より約 1.2 m 西で検出された。幅 60～80 cm、深さ 24 cm を測る。南側では、残存状況が非常に悪く、深さは 5 cm 程度であった。築地基底部と考えられる硬化面 3005 の西側に位置することから、東洞院大路東側側溝の可能性が考えられる。断面観察からは、残存状況が良くないことから造り直し等の痕跡を認めるることはできなかった。

出土した遺物から溝 3003 は 12 世紀前半～12 世紀後半（京都 V 期中～新）と考えられる。

#### 硬化面 2005（第 7・10 図、図版五）

硬化面 2005 は、A 1～C 1 グリッドにおいて、最大幅約 2.5 m、厚さ 10 cm 前後の砂と径 3～5 cm 大の砾で非常に硬く突き固められている状況が見られた。この硬化面を断ち割って観察すると、皿状に掘り窪めたあとに砾と砂を充填しているように見られる（第 10 図ベルト 1、2 第 1 層）。溝 3003 の東に位置すること、また、砾と砂を硬く突き固めている状況や側溝の可能性を示唆した溝 3003 の東側に位置することから東洞院大路路面の一部である可能性が考えられる。

出土遺物は、小片のため図示していないが、硬化面 2005 は 11 世紀後半～12 世紀後半（京都 V 期）と考えられる。

#### ピット 2016（第 7 図、図版五）

ピット 2016 は、E 2 グリッドで検出した。南側を土取り坑 2010 によって壊されている。平面形状は、楕円形である。長径 41 cm 以上、短径 25 cm、深さ 16 cm を測る。底部には 15 × 20 cm の長方形の礎石が置かれていた。

出土した遺物は、小片であるため図示していないが 13 世紀後半～14 世紀中頃（京都 VII 期）の遺物が出土している。

### **礎石 3027、3028 (第7図、図版五)**

礎石 3027、3028 は、E 2 グリッドで検出した。礎石である。上面が平坦であることから礎石であると判断した。礎石は 2 つしか検出されていないため関連は明確にはできないが、南北に並ぶようにも見えることから、建物跡や柵等の遺構の一部である可能性も考えられる。

### **3. 第III期 (第8図、図版三)**

第III期の遺構は、東洞院大路東側側溝が埋まり、宅地として考えられる硬化面 3005 より東側では土取り坑などが検出され宅地としての土地利用が終り、耕地化し始める時期である。主な遺構としては、土取り坑、疊敷き、路面上から検出された土坑等がある。鎌倉時代前半～南北朝時代頃と考えられる。

### **疊敷き 3039、3040 (第8・10図、図版六)**

F・G 1 グリッドに位置する。南北に 7 m、東西に 2 ～ 3 m の範囲で検出した。南は調査区外へと延びる。調査時は、平面観察から東と西でやや段差が見られるように思われ 2 つ遺構番号を付加したが断ち割って断面を観察すると重複関係は見られなかったため一連のものとして判断した。疊は、15 ～ 20 cm の深さで埋められていた。西一行北七門と西一行北八門との境界線より約 50 cm に位置し、東洞院大路東側側溝とした溝 3003 を覆っていたことから、溝の埋め立てに関連する遺構と考えられる。

出土した遺物から 12 世紀末～13 世紀前半（京都VI期古～中）と考えられる。

### **集石 1008 (第8・11図、図版六)**

F 2 グリッドに位置する。平面形状は、不整形な楕円形である。遺構中央は近世の耕作溝によって失われている。規模は、長軸 2.4 m、短軸 1.64 m、深さ 19 cm を測る。土坑内には、15 cm 前後の疊が敷き詰められていた。周囲には、同様な遺構は検出されていない。このため、明確な遺構の性格は示し得ないが土坑状の掘り込みの中に疊が詰め込まれた状況から地業の一部であつた可能性も考えられる。

出土した遺物から 12 世紀末～13 世紀前半（京都VI期古～中）の遺構と考えられる。

### **土坑 2012 (第8図)**

E 2 グリッドに位置する。平面形状は円形である。径 58 cm、深さ 20 cm を測る。

出土した遺物から 13 世紀初頭から 13 世紀中頃（京都VI期中～新）の遺構と考えられる。

### **土坑 3052 (第11図、図版六)**

G 2 グリッドに位置する。平面形状隅丸である。径 1.15 m、深さ 68 cm を測る。底面南寄りからは、南北に 2 つの箱状の木材が出土した。南側の木材は、長さ 45 cm、幅 15 cm、深さ 2 cm を測る。北側の木材は、長さ 50 cm、幅 20 cm、側板高 3 cm を測る。南北の据えられた材は約 3 cm 程度の段差をもち、南の方が高くなっている。また、南側の木材が北側の材よりも 8 cm 東へずれて置かれている。また、箱状木材は長辺を軸として東北東に主軸方向を持つ。2 つの箱状木材は、床板と側板が検出されていることから柵であった可能性も考えられる。

出土遺物は、小片のため図示していないが、12 世紀前半～後半（京都V期中～新）のものが

出土している。

#### 土坑 3053（第 13 図、図版六）

G 2 グリッドに位置する。平面形状は、やや歪んだ梢円形である。規模は、長径 1.49 m、短径 95cm、深さ 54cm を測る。覆土は、大きく 2 層に大別できる。下層は、砂泥層で硬く締まる。上層は、泥砂層で非常に硬く締まる。土坑として掘削しているが、撓み等に土をいたたいた整地跡の可能性も考えられる。

出土した遺物から 12 世紀代（京都 V 期）と考えられる。

#### 土坑 3060（第 11 図、図版六）

G 2 グリッドに位置する。平面形状は梢円形である。長軸 1.37 m、短軸 1.05 m、深さ 56cm を測る。約 30cm 程度掘り下げたところで径 15 ~ 20cm の礫が検出された。礫とともに土師器の鉢が南側に倒れ掛かった状態で出土した。礫の下には約 10 ~ 15cm 空洞が見られた。礫を取り除くと土坑 3052 で見られたような長方形の木質を検出した。土坑 3052 と同様に 2 つの櫃と思われる箱状木材が置かれていた。南側の箱状木材は、長さ 40cm、幅 35cm、深さ 5cm で、ほぼ、正方形にちかい形状である。北側の箱状木材は、長さ 40cm、幅 20cm、深さ 10cm である。土坑 3052 と同様に木材は東北東に主軸方向をもつ。土坑 3060 は、土坑 3052 と形状、木材の出土など特徴が共通していることから同様の遺構と考えられる。

土坑 3060 は、出土した遺物から 13 世紀半ば（京都 VI 期新）と考えられる。

土坑 3052 と土坑 3060 は、遺構底面に、形状から見て櫃と考えられる箱状の木材が出土している。この 2 基の遺構は、同じ南北ライン上に位置し、遺構間の間隔は約 3m である。また、この箱状木材の配置や傾きなどもほぼ同様であった。箱の蓋については両遺構共に残存状態が不良であったため不明である。箱状木材の中からは出土遺物はないため何が認められていたかについては不明と言わざるを得ない。土坑 3052、3060 の性格については、底部から箱状木材が出土している。この状況から何らかを保管あるいは埋納した遺構と考えられる。時期については、土坑 3052 は、12 世紀としているが、細片であるため正確とは言えない。土坑 3060 との位置関係や形状、形態から同時期に存在したと考えられる。この考え方からは、土坑 3052 は、土坑 3060 同様で 13 世紀半ばと考えられる。

出土した遺物は、12 世紀代（京都 V 期）の遺物であるが、覆土が他の土取り坑と同様なことなどから土坑 3053 は土取り坑の可能性も考えられる。

#### 土器溜 3001（第 11 図、図版七）

E 1 グリッドに位置する。やや歪んだ梢円形を呈する。規模は、長軸 1.75 m、短軸 1.02 m、深さ 20 cm を測る。土器溜りは炭で埋没していた。この炭層中からは、土師器皿を中心として、青磁碗、須恵器鉢、瓦などが出土している。炭で埋没している状況が見られたが、出土した遺物には、2 次焼成を受けた様子は見られなかった。土師器等を取り上げると、遺構のほぼ中央から須恵器甕の底部を平坦にして逆位の状態で出土した。遺物の出土状況に規則性はなく墓や祭祀等を示す痕跡は認められなかった。

土器溜 3005 は、出土した遺物から 12 世紀中頃～後半（京都 V 期中～新）と考えられる。

### 羽釜埋納遺構 3031（第11図、図版七）

E 1 グリッドに位置する。平面形状は楕円形を呈する。規模は長軸 71cm、短軸 45cm、深さ 11cm を測る。土坑内のほぼ中央から羽釜が伏せた状態で出土した。伏せた羽釜の内側の堆積土は、非常に硬く締まっていた。本遺構は、道路部分と考えられる位置から検出されている。羽釜の内側の覆土からは、祭祀や墓を示し得るような遺物は出土していないが、路面と考えられる位置から出土している事や羽釜が伏せた状態で出土していることから祭祀的な遺構である可能性が考えられる。

出土した遺物から遺構の時期は 12 世紀後半～13 世紀初頭と考えられる。

### ピット列（第8・12図、図版四）

E・F 2 グリッドに位置する。主軸方向は、南北方向である。南から北へ 3025、3026、3016、3013、3014、3018、3011、3035～3037 の 10 基のピットと 2 基の礎集中遺構 3085、3019 からなる。ピット 3025 と 3026、ピット 3013 と 3014 が重複関係にあり、ピット 3025、3014 が新しい。規模は、径 45～50cm、深さ 30～40cm である。底面標高は、24.7～24.85m である。ピット列は、3011 より北では硬化面 3005 を掘削後に確認しているが、これらのピットは南北方向にほぼ一列に並ぶことから、3011 より南側のピットと同様に硬化面 3005 上面から掘りこまれたピットであると考えられる。ピット 3025、3016、3011、3035、3037 は、概ね 1.3～1.5m の間隔で並ぶ。3036 と 3037 は間にピットを見つけることができなかつたが概ね倍数である。また、3025 と 3037 は、礎石を伴う。これら以外 5 基のピットについてもピット列、礎集中などについても同一線上にあることから造り変えや補修等に関係するピットと考えられる。硬化面 3005 上面から掘り込まれていることから築地等が廃絶した後に土地区画に関連する遺構と考えられる。

出土遺物は、細片のため図示していないが 12 世紀後半～13 世紀初頭（京都V期新～VI期古）のピット列と考えられる。

### 溝 2004（第8・10図）

E 1～G 1 グリッドに位置し南北方向に走る。北へ行くにつれ、やや西に振れる。本遺構が確認できたのは、E グリッド北側付近までで、それ以北では近世の溝によって壊されている。規模は幅 70cm 以上、深さ 20cm を測る。覆土は、泥砂層（第 10 図ベルト 1 の 3 層、ベルト 2 の 4・5 層）で非常に硬く締まっている。また、ベルト 2 の 4～9 層を見ると連続性が見られるなど一連の整地層と考えられる。また、硬化面 3004 と重なる。溝 2004 の覆土も非常に硬く硬化していたことからは、溝状遺構ではなく、整地層の一部と考えられる。また、溝 3003 の東の肩を覆っている状況からは、溝 3003 等を埋め立てて再度整地した可能性も考えられる。

溝 2004 から出土した遺物は、12 世紀後半～13 世紀初頭である。硬化面 2005 よりやや新しい遺物が出土している。

### 土取り坑 2002・2003（第13図）

D・E 2 グリッドに位置する。土取り坑 2002 と 2003 は重複しており、土取り坑 2002 が 2003 を壊している。共に東側は、調査区外へと延びる。平面形状は、土取り坑 2002 は不整形である。規模は、長径 2.19m 以上、短径 2.09m、深さ 30cm を測る。土取り坑 2003 は、平面形状は検出

状況から方形あるいは長方形と推測できる。長径 1.5 m、短径 1.17 m 以上、深さ 55 cm を測る。

出土遺物は、土取り坑 2002 からは明確に年代を示し得るものは出土していない。土取り坑 2003 から出土した遺物は 14 世紀半ば（京都VII期新～京都VIII期古）と考えられる。

#### 土取り坑 2010（第 13 図、図版七）

A 2・3 グリッドに位置する。平面形状は不定形長方形である。規模は、長軸 4.88 m、短軸 2.27 m、深さ 43 cm を測る。構内には、少なくとも 3 カ所の段差が見られる。これらは、土取りが複数回にわたり行われたためと考えられる。

土取り坑 2010 は、出土した遺物から 13 世紀後半～14 世紀中頃（京都VII期）と考えられる。

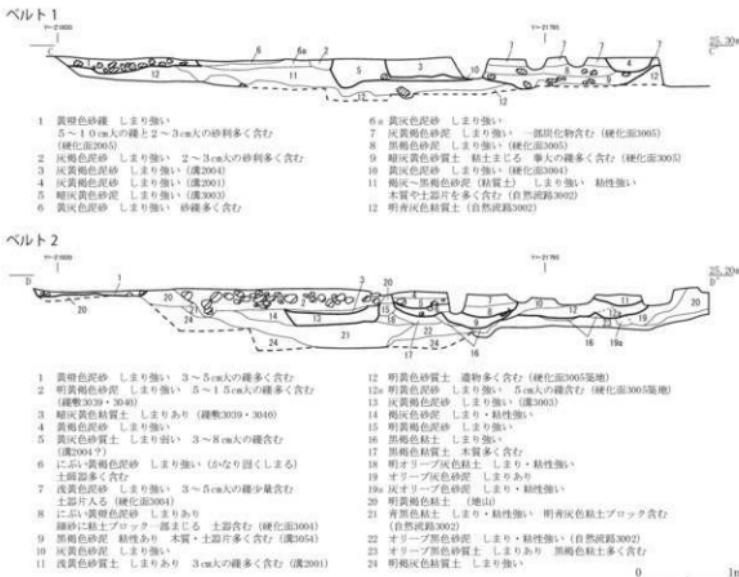
#### 4. 第IV期（第 9 図、図版七）

第IV期は、当該地周辺が耕作地となる。これに関連すると思われる溝 9 基を検出している。

#### 溝 1001～1007、1009、1011（第 9 図）

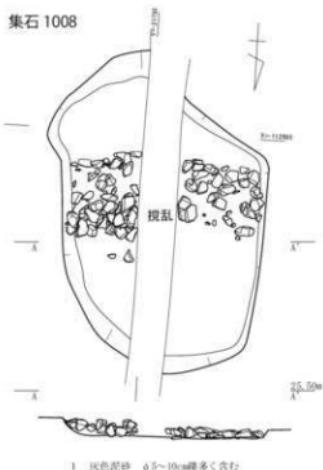
溝 1004、1007、1009 を除く 6 条の溝は、南北方向に走る。溝 1004 は、北西～南東、溝 1009、1011 は、やや北に振れているがほぼ東西方向に走る。幅 20～30 cm、深さ 10 cm 前後を測る。構内には、径 3 cm 前後の小礫が多量に詰め込まれていた。また、溝底部には、厚さ 5 mm 程度の板が敷かれていた。多量の小礫が詰め込まれた状況から耕作に関連する暗渠と考えられる。

出土した遺物は、概ね 18 世紀が中心であった。

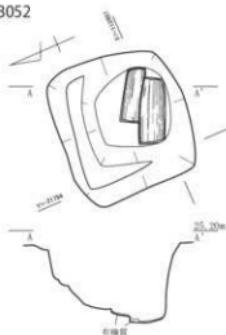


第 10 図 ベルト 1・2（縮尺 1/50）

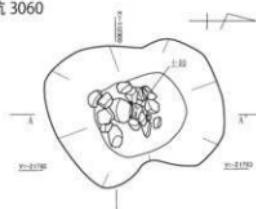
集石 1008



土坑 3052



土坑 3060



土器溜 3001



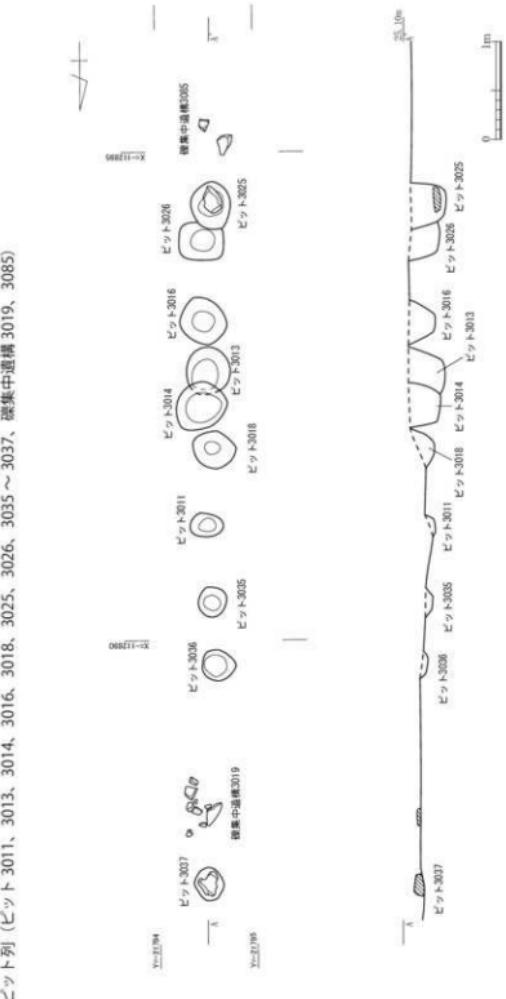
- 1 灰暗黄色泥砂 しまり強い 3~5cmの礫多く入る 硬化物多く含む
- 2 黄褐色砂泥 粘性あり
- 3 黄褐色砂質土 粘性強い
- 4 黄褐色砂質土 砂質土多く含む しまり弱い
- 5 黄褐色粘土質土 砂質土・木質・土器多く含む
- 6 黄褐色粘土 しまり強い 粘性強い
- 7 棕灰色粘土 粘性強い

0 1m

- 1 黄褐色粘土 しまり強い
- 2 黄褐色粘土質土 しまり・粘性強い 木炭色粘土ブロック、灰化物含む
- 3 黄褐色泥砂 しまり強い 粘性あり 土師器底を多く含む (下層の3002含む)

0 1m  
(3031のみ1/20)

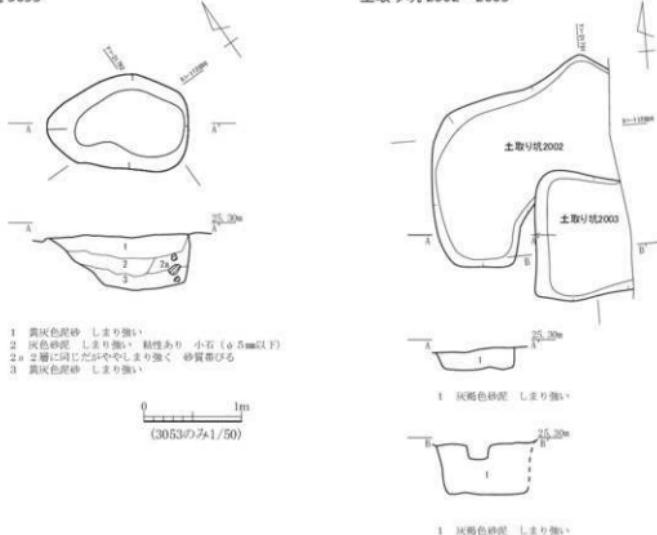
第 11 図 第Ⅲ期遺構図 1 (縮尺 1/40, 1/30, 1/20)



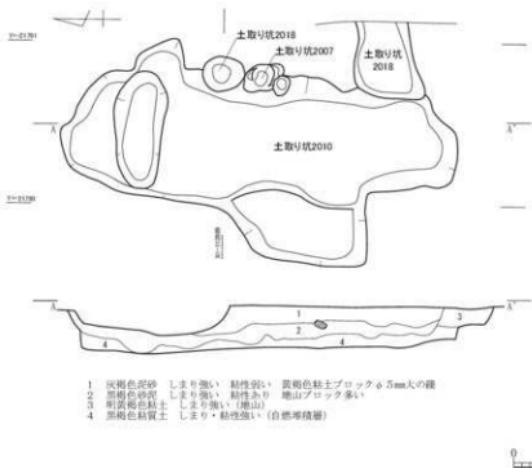
第12図 第III期遺構図2（縮尺1/50）

土坑 3053

土取り坑 2002・2003



土取り坑 2010



第13図 第III期遺構図3（縮尺1/60、1/50）

## 第4章 遺物

### 第1節 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物はコンテナ数で40箱である。整理段階でランク分けを行った結果、34箱となった。遺物の種類は土師器、須恵器、陶磁器、瓦質土器、瓦器、木製品、石製品など、平安時代後期から江戸時代までの遺物が出土した。以下、遺構別に概要を述べる。掲載遺物の詳細については、第7表の出土遺物観察表に掲載した。

第5表 遺物概要表

時代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク 点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
第Ⅰ期	土師皿、土師器、須恵器、白色土器、瓦質土器、陶器、白磁、石製品、木製品		土師皿9点、土師器2点、須恵器2点、白色土器1点、瓦質土器2点、陶器1点、白磁3点、石製品1点、木製品1点		
第Ⅱ期	土師皿、土師器、須恵器、山茶碗、瓦器、瓦質土器、白磁、青白磁		土師皿14点、土師器1点、須恵器2点、山茶碗5点、瓦器6点、瓦質土器1点、白磁4点、青白磁1点		
第Ⅲ期	土師皿、土師器、須恵器、山茶碗、瓦器、瓦質土器、青磁、輸入陶器、瓦		土師皿22点、土師器2点、須恵器4点、山茶碗2点、瓦器1点、瓦質土器3点、青磁1点、輸入陶器1点、瓦5点		
第Ⅳ期	土師皿、土師器、瓦質土器、陶器、燒経陶器、磁器、白磁、瓦、土製品				
合 計		34箱	97点（9箱）	4箱	21箱

### 第2節 第Ⅰ期の出土遺物

#### 自然流路3002（第14図、図版九）

1～8は土師器の皿である。1はロクロ成形である。2はコースター型であり、内面に付着物がある。3～5は口径9.2～9.6cmの小形のもので、6～8は口径14.3～15cmの大形のものである。9は土師器の羽釜で、口縁部を最大径とし、体部はほぼ垂直である。口縁直下に短く、断面方形形状の鰐を付ける。体部外面には粗いハケメを施す。胎土は粗く、砂粒を多く含む。10世紀代（京都Ⅱ期新～Ⅲ期新）のものと考えられる。10は須恵器の瓶である。体部は直線的に開く。内面に粗いロクロナデ成形痕を残す。外面底部は回転糸切痕を残すが、凹んでいる。10世紀半ば（京都Ⅲ期古～中）のものと考えられる。11は白色土器の碗である。底部は内面の中央部を粗く窪め、外面に回転糸切痕を残す。12・13は瓦質土器の盤である。12は器壁が2cm前後と厚く、口縁部は内湾する。口縁上端は平らである。13は口縁部を肥厚させ、上端を平らにする。胎土は精良である。13世紀前半～後半（京都VI期新～VII期古）のものと思われ、混入品と考えられる。14～16は白磁の碗である。14は口縁部端を細く収めて外反させる。見込み付近には沈線を巡らす。外面は体部下半まで施釉される。15は幅の広い玉縁状口縁である。内底付近に沈線を巡らす。内面は全体に釉が施され、外面は上半のみに施釉される。16は底部が厚く、低い削り出し高台を持つ。見込み付近に一条の沈線を巡らす。高台は露胎で、内面は施釉される。玉縁状口縁

の白磁の底部である。17は小形の滑石製石鍋である。体部の中央付近に、削り出された短い鉗を巡らす。蔓取手穴が1ヵ所残る。体部外面にケズリ痕がある。18は木製の毬杖球と考えられる。幅3.3cm、長さ3.8cmを測る。刀子等による削りで成形がされる。

自然流路3002から出土した遺物は、10世紀初頭～12世紀後半（京都II期新～V期新）のものと考えられる。

#### 撻み3078（第14図、図版九）

19は土師器の皿である。口径14.9cmの大形のものである。20はロクロ土師器の壺である。外面体部に有機物が付着する。21は須恵器の甕である。口縁端部は断面方形状を呈し、外傾した面をなす。体部外面に格子状のタタキを施す。22は壺で、肩部に二条の沈線を巡らす。猿投産の三筋壺か。

撻み遺構3078から出土した遺物は、12世紀前半～12世紀後半（京都V期中～新）のものと考えられる。

### 第3節 第II期の出土遺物

#### 硬化面3005（第15図、図版十）

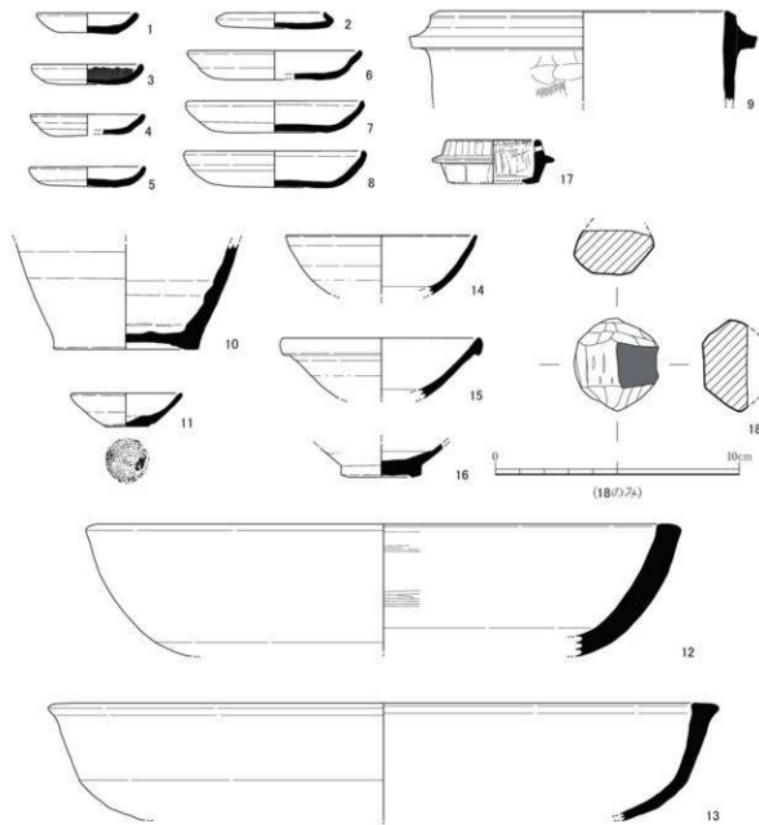
23～27は土師器の皿である。23は「て」の字状口縁で、器壁が4mm程と厚手である。24・25は口径10.1cmと小形、26・27は口径14.4～14.9cmと大形である。28は須恵器の小瓶である。口縁は短く外反し、端部は肥厚して面を作る。10世紀後半（京都III期中～新）の混入品と考えられる。29～31は山茶碗である。29の高台は幅が広く、外側がほぼ直立である。底部外面に回転糸切痕を残す。高台内に墨痕があり、硯として転用されていた可能性がある。尾張型3型式である。30の高台は外側が直立気味であり、端部に剥殻痕が残る。外面底部のロクロ痕を消している。尾張型4型式と思われる。31の高台はやや丸みを帯びた低いものである。底部外面に回転糸切痕を残す。尾張型4型式である。32は山茶碗の皿である。断面形状三角形の貼り付け高台である。底部に内部底面に回転糸切痕が残る。尾張型4型式である。33は瓦器の皿である。見込みにジグザグ暗文を施す。34・35は白磁の碗である。34は体部がやや内湾し、口縁部を軽く外反させる。外面上半に猫搔がある。35の高台は高さが1.2cmほどで、ほぼ露胎である。内底面付近に沈線が巡る。36は白磁の小碗である。口縁部はわずかに外反する。高台は低く、断面は三角形状である。体部内面の中央付近に一条の沈線を巡らす。37は白磁の皿である。低く小さい高台を持つ。見込みには沈線を巡らす。露胎の外底面に墨書がある。38は青白磁の皿である。底部から緩やかに内湾して立ち上がる。外面底部は露胎である。

硬化面3005から出土した遺物は、12世紀前半～12世紀後半（京都V期中～新）のものと考えられる。

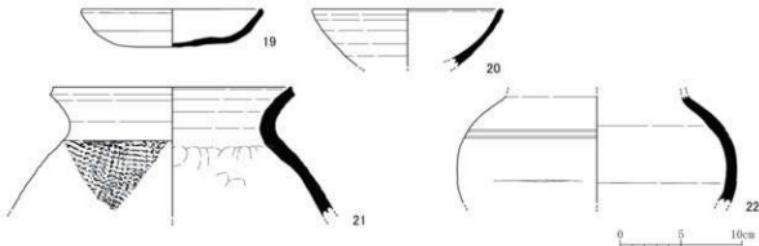
#### 硬化面3004（第15図、図版十）

39は土師器の皿である。口径9.8cmの小形のものである。40は東播系須恵器の鉢である。平らな底から直線的に斜め上方にのびて体部を形成する。内面全体から割れ口にかけて有機物が付着する。

自然流路3002

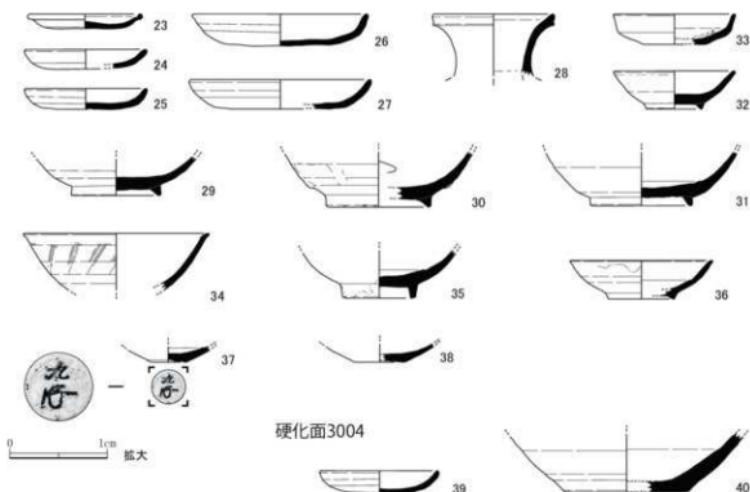


境み3078



第14図 第Ⅰ期出土遺物実測図（縮尺1/4, 1/2）

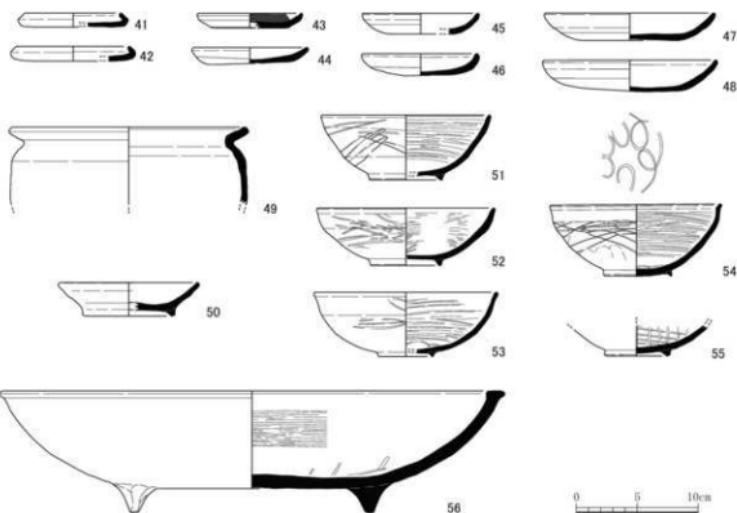
硬化面 3005



硬化面 3004



溝 3003



第 15 図 第 II 期出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

硬化面 3004 から出土した遺物は 12 世紀前半～12 世紀後半（京都 V 期中～新）のものと考えられる。

#### 溝 3003 (第 15 図、図版十)

41～48 は土師器の皿である。41・42 はコースター型である。43～46 は口径 8.6～9.8 cm の小形のものである。43 の内面には漆のようなものが付着する。45 は全体的に黒化しており、体部外面には付着物がある。47・48 は口径 14 cm 台の大形の皿である。49 は土師器の甕である。体部上端から口縁端部にかけてやや肥厚し、口縁部端は内上方へやや巻き込んで取めている。10 世紀前半～11 世紀初頭（京都 III 期）のものと思われ、混入品と考えられる。50 は山茶碗の皿である。低い貼り付け高台をもつ。高台の外側は直立である。底部外面に回転糸切痕が残る。尾張型 4 型式である。51～55 は瓦器の碗である。51 の体部は緩やかに内湾し、口縁部はほぼ直立する。口縁端部内面には沈線を巡らす。内面のミガキはやや粗めで、外面は下半から上部に斜め方向の粗いミガキを施す。見込みの暗文は螺旋状である。52 は内面に横方向、外面上部に斜め方向の粗いミガキを施す。口縁部はわずかに肥厚し、口縁部端を丸く收める。53 は口縁部を僅かに外反させる。口縁部端に沈線ではなく、丸く收める。内面のミガキは粗く、横方向であり、外面は上半に粗いミガキを施す。見込みには螺旋状暗文が施される。51～53 は桶菓型と考えられる。54 は口縁部端を外反させ、内側に沈線を巡らす。内面のミガキは平行方向で、密である。外面は下半から上部に斜め方向の粗いミガキを施す。高台は逆三角形の細長いものである。見込みの暗文は螺旋状である。大和型である。55 は外方に突出した厚みのある高台を持つ。見込みの暗文は格子状である。一部残存する体部内面のミガキが幅 3mm 程と太く、暗文より後に施されていることから、和泉型と思われる。56 は瓦質土器の盤である。口縁部端を肥厚させ、上端を平らにする。見込みに格子状暗文を施している。

溝 3003 から出土した遺物は、12 世紀半ば～12 世紀後半（京都 V 期新）のものと考えられる。

#### 第 4 節 第 III 期の出土遺物

##### 礎敷き 3039・3040 (第 16 図、図版十一)

57～61 は土師器の皿である。57 は口径 10cm のコースター型である。58・59 は口径 9.6～9.8 cm の小形のもので、59 には内面に付着物がある。60・61 は口径 13.4 cm～14.3 cm の大形のものである。62 は東播系須恵器の鉢である。口縁端部は断面形状を呈している。63 は須恵器であるが、小破片ため、詳細は不明である。64 は山茶碗である。見込みは磨かれ、滑らかである。高台は低く、外側は直立に近い。外面底部中央に、一方向ナデを残す。尾張型 4 型式である。

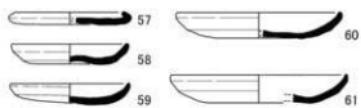
礎敷き 3039・3040 から出土した遺物は、12 世紀後半～13 世紀初頭（京都 V 期新～VI 期古）のものと考えられる。

##### 集石 1008 (第 16 図、図版十一)

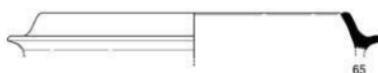
65 は瓦質土器の羽釜である。口縁部は内傾する。頸部に幅の狭く、方形状の鈙を巡らす。

集石 1008 から出土した遺物は、12 世紀末～13 世紀前半（京都 VI 期古～中）のものと考えられる。

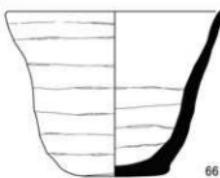
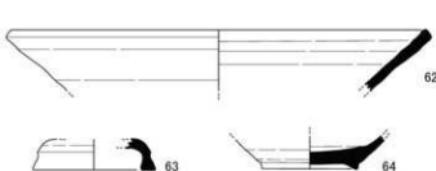
碟敷き3039・3040



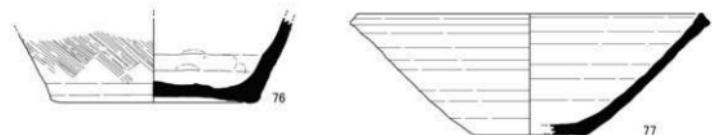
集石1008



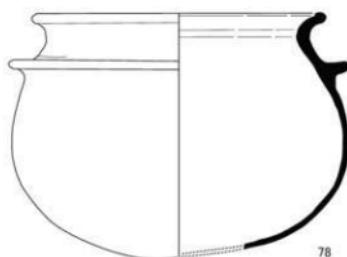
土坑3060



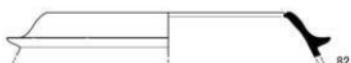
土器溜 3001



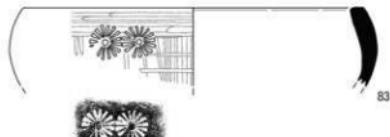
羽釜埋納遺構3031



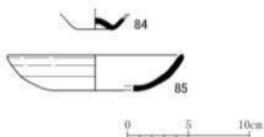
溝2004



土取り坑2003



土取り坑 2010



0 5 10cm

第16図 第Ⅲ期出土遺物実測図（縮尺1/4）

#### **土坑 3060 (第 16 図、図版十三)**

66 は土師器の鉢である。体部上方を外側に開き、内外面に粘土組接合痕を顕著に残す。底部内面と体部両面に付着物がある。胎土は粗く、砂粒を多く含む。

土坑 3060 から出土した遺物は、12世紀前半～後半（京都V期中～新）の混入もあるが、13世紀半ば（京都VI期新）のものと考えられる。

#### **土器溜 3001 (第 16 図、図版十一)**

67～75 は土師器の皿である。67～73 は口径 8.3～10.5 cm の小形のものであり、74・75 は口径 14cm 台の大形のものである。76 は須恵器の甕である。平底であり、体部外面に左上がりの平行のタタキを施す。77 は東播系須恵器の鉢である。体部はやや外反しており、口縁端部は外側にわずかに肥厚し、面をもつ。

土器溜 3001 から出土した遺物は、12世紀前半～12世紀後半（京都V期中～新）のものと考えられる。

#### **羽釜埋納遺構 3031 (第 16 図、図版十二)**

78 は土師器の羽釜である。口縁部は「く」の字形に外反し、口縁部端を内側に折り返す。肩部上方に水平の鶴を巡らす。外面底部には煤が付く。大和型である。

羽釜埋納遺構 3031 から出土した遺物は、12世紀末～13世紀前半（京都VI期古～中）のものと考えられる。

#### **溝 2004 (第 16 図、図版十一)**

79～81 は土師器の皿である。口径 9.0 cm～10.2 cm の小形のものである。82 は瓦質土器の羽釜である。口縁部は内傾しており、端部は内側にやや肥厚する。頭部に幅の狭い鶴を巡らす。

溝 2004 から出土した遺物は、12世紀末～13世紀前半（京都VI期古～中）のものと考えられる。

#### **土取り坑 2003 (第 16 図、図版十一)**

83 は瓦質土器で、奈良火鉢の浅鉢である。口縁部は内湾して、端部は丸みをもって取めている。体部外面上方に、花文のスタンプを押捺する。

土取り坑 2003 から出土した遺物は、14世紀半ば（京都VII期新～京都VIII期古）のものと考えられる。

#### **土取り坑 2010 (第 16 図、図版十一)**

84・85 は土師器の皿である。84 はへそ皿であり、85 は口径 14.4 cm の大形のものである。

土取り坑 2010 から出土した遺物は、13世紀末～14世紀後半（京都VII期中～VIII期古）のものと考えられる。

### **第 5 節 瓦類**

#### **集石 1008 (第 17 図、図版十二)**

86 は単弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は宝珠形で、八葉と考えられる。凸形の中房に 1 + 5 の蓮子を配置し、中房の周りを蕊蒂で囲む。胎土は粗く、砂粒や細躰を多く含む。山城産である。

**土取り坑 2010 (第 17 図、図版十二)**

87 は単弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は七葉と考えられる。間弁は撥形である。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を加え接合している。胎土は粗く、砂粒や細礫を多く含む。

**ピット 2012 (第 17 図、図版十二)**

88 は右巻きの三巴文軒丸瓦である。巴の頭はやや角張り、互いに連結する。尾部は長く、周縁に接しない。瓦当部は歪んで梢円形をしている。胎土は粗く、砂粒や細礫を含む。灰白色である。

**土器溜 3001 (第 17 図、図版十二)**

89 は唐草文軒平瓦である。上外区に面取りを施し、左脇区に大きく范ズレする。凹面には布目痕が残る。瓦当部の成形は、半折り曲げ技法と考えられる。山城産である。

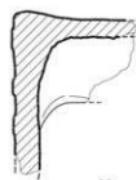
**土坑 3053 (第 17 図、図版十二)**

90 は幾何学文軒平瓦である。内区には斜格子文を施し、格子の中に紡錘形の珠文を配する。凹面には布目痕が残る。折り曲げ技法による成形である。山城産である。

集石 1008



ピット 2012



土取り坑 2010



土器溜 3001



土坑 3053



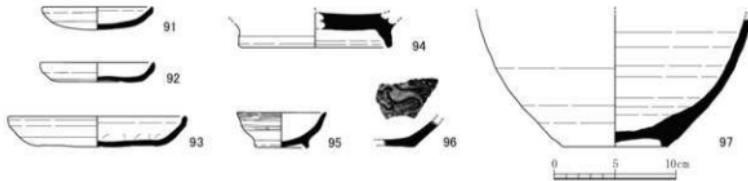
第 17 図 出土瓦実測図 (縮尺 1/3)

## 第6節 包含層（第18図、図版十二）

91～93は土師器の皿である。91・92は口径9.0～9.4cm小形のものであり、93は口径14.6cmの大形のものである。94は山茶碗の底部である。底部内面は磨かれ、滑らかであり、見込みに赤色顔料が付着する。ただ赤色顔料は、断面にも付着していることから、破損後の再利用か、底部外面のロクロ痕は消している。尾張型2型式と考えられる。95は瓦器の小碗である。内面と外面体部上半に横方向のミガキを施す。口縁端部をやや外反させる。三角形状の高台を持つ。96は輸入陶器の黄釉褐彩盤である。見込みの小片で、外面は露胎し、内面に龍が描かれる。97は青磁の壺である。底面内側のみを浅く削り出した高台をもつ。底面を含め、全面が施釉される。

包含層から出土した遺物は、12世紀代（京都V期中～VI期古）のものと考えられる。

包含層



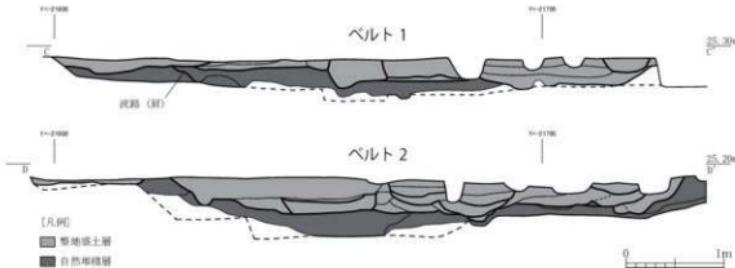
第18図 包含層出土遺物実測図（縮尺1/4）

## 第5章 まとめ

今回の調査地においては、烏丸町遺跡に関連する遺構・遺物は検出できなかった。遺構の検出状況、出土した遺物の年代観から本調査地は、大きく4時期に分けられ、これを第Ⅰ期～第Ⅳ期として報告した。第Ⅰ期は、平安京における条坊制に基づく土地開発・利用以前の状況と考えられる。第Ⅱ期は、築地塀で囲まれた宅地としての土地利用が成されていた時期と考えられる。第Ⅲ期は、本来は宅地内である地点から土取り坑などが検出されていることから宅地廃絶後のものと考えられる。第Ⅳ期は近世に入り、耕作地となる時期と考えられる。以下、第Ⅰ期～第Ⅳ期の土地利用の変遷と年代について考えてみたい。

### 第1節 第Ⅰ期（宅地利用以前の10世紀～11世紀半頃）

第Ⅰ期は、前述したように条坊制に基づく土地開発以前の状況が見られた。調査区のほぼ中央を南北に流れる自然流路3002を検出した。流路の覆土は大きく2層にわかれ上層は、整地・盛土層であったが、下層は、青灰色粘質土層が堆積していた。自然堆積層の上面からは、植物遺体の痕跡などが見られることから流路がある程度埋まつた後も湿地状態であったと考えられる。この下層からも遺物が出土している。その多くは11世紀後半～12世紀後半（京都V期）ものが中心であるが最下部からは、10世紀初頭～11世紀初頭（京都II期新～III期中）の遺物が出土している。これについては、当該地周辺においても平安時代前期～中期にかけての流路等が多く検出されている。また、2017年に行われた左京九条三坊八町跡の調査では、流路と共にそれに平行あるいは直交する耕作に関連すると考えられる溝などが検出され、条坊区画に規制されるものではないとしている。今回の調査においては平安時代前期～中期の耕作に関する遺構は検出されていないため、当該地では土地利用はなされていなかったと考えられる。流路の覆土である自然堆積層からは、前述したように平安時代前期～中期を含む11世紀後半～12世紀後半（京都V期）までの遺物が出土している。後述するII期の遺物が12世紀前半～後半（京都V期中～新）であることを考えると11世紀後半頃までは、流路は自然に流入した土砂などによる埋没過程にあったと考えられる。12世紀に入ると条坊区画に規制された開発が行われ埋め立て等が行われ土地の整備が行われていったものと考えられる。



第19図 自然流路断面模式図（縮尺1/50）

## 第2節 第Ⅱ期（宅地としての土地利用期の 11世紀後半～13世紀前半頃）

第Ⅱ期では、宅地としての土地利用が行われていたことが推定できる遺構を検出した。

宅地に関連する遺構としては、築地基底部に想定される硬化面3005、その東側では、内溝2001、東洞院大路東側側溝と考えられる溝3003、東洞院大路路面遺構と想定できる硬化面2005などを検出した。硬化面3005より東側では、根石を伴うビットを検出しているが大部分を土取り坑によって失われており、建物を想起できるような遺構は検出できなかった。

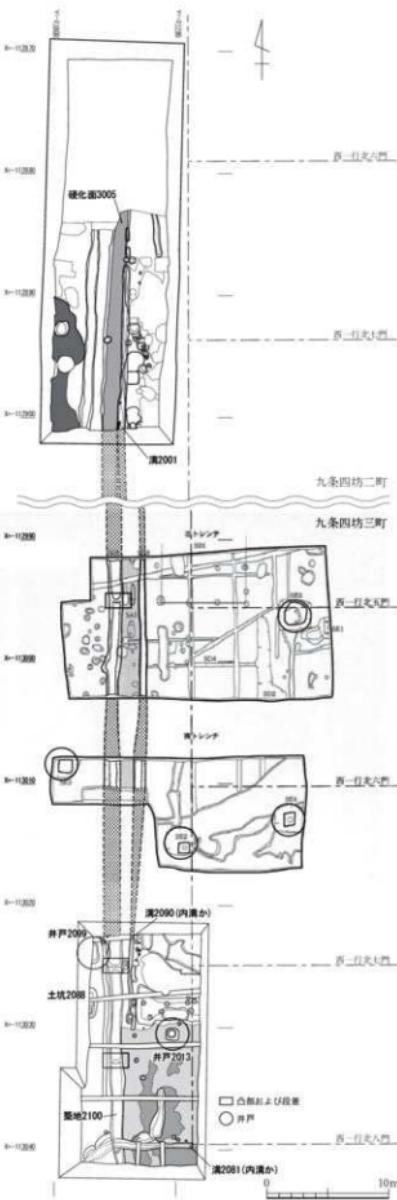
硬化面3005は、平成28年に実施した平安京左京九条四坊三町跡の調査において検出した築地基底部2100と同一線上にあり、築地推定線より約6m西へずれていることも共通している（第20図参照）。

第Ⅱ期は、当該地が条坊区画に規制された宅地としての土地利用が成されていた時期と思われる。出土遺物に大差なく条坊区画に規制された宅地として利用されていた時期は12世紀前半～13世紀初頭頃までと推測される。

## 第3節 第Ⅲ期（宅地廃絶後の13世紀後半～14世紀頃）

第Ⅲ期は、宅地としての役割を終え衰退していく時期である。

この時期の遺構としては、土取り坑が主な遺構である。土取り坑は、主に調査区に東側に集中している様相が見られた。この土取り坑からは11世紀後半～12世紀後半の遺物が多く出土しているが13世紀～14世紀の遺物も含まれる。こうしたことから13世紀の速い段階から宅地としての土地利用はされなくなり、耕作や土取りの場として変遷していったと考えられる。



第20図 土地区画間連遺構比較図（縮尺1/400）

## 第4節 第IV期（18世紀以降）

第IV期では、暗渠と思われる9条の溝を検出している。この暗渠状の溝は左京九条周辺では、多數みられる。今回の調査においては、これらの溝から18世紀の陶磁器等が出土している。この結果から、近世にはいると耕作地としての土地利用がなされていたと考えられる。

## 第5節 瓦器について

今回の調査では、瓦器の碗、小碗、皿が多く出土した。小破片を含む230点の瓦器が認められ、年代や産地を分類した（第6表）。

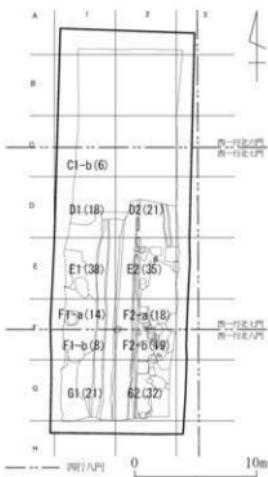
### 1 出土状況

四行八門の区分けを境にして、瓦器の出土数に差があったため、出土瓦器を分類し、グリッド毎に瓦器の出土数を示した（第21図）。なお、グリッドC1、F1・2については、四行八門にかかるため、本節においては便宜上、C1の西一行北七門側をC1-b、F1・2の西一行北七門側をF1-a・F2-a、西一行北八門側をF1-b・F2-bとした。その結果、西一行北七門の範囲から出土した瓦器は約65%であり、西一行北八門の範囲から出土した瓦器は約35%であった。

また、瓦器が多く出土している遺構を見てみると、硬化面3005からは54点出土しており、全体の瓦器の点数の約23%である。その他に、溝3003は30点、自然流路3002は18点出土している。自然流路3002、溝3003、硬化面3005から出土した瓦器は全体の44%である。これらの遺構は四行八門の区割りに跨っている遺構である。そこで、これらの遺構においても四行八門の区割りによる出土数の偏りがあるのか調べた。結果として、西一行北七門と西一行北八門との区割りにおいてほぼ同数が出土しているものと、片方に偏りのあるものがあった。前者については硬化面3005と自然流路3002が当たる。硬化面3005については、西一行北七門の範囲から29点、西一行北八門の範囲から25点出土している。また、自然流路3002についても、西一行北七門の範囲から10点、西一行北八門の範囲から8点出土した。後者にあたる溝3003では、出土している30点のうち、その全てが西一行北七門から出土している。

### 2 年代について

出土した瓦器のうち、年代を比定できるものは148点あった。その年代幅としては、京都V期古～VII期古（11世紀末～13世紀末）である。しかし、その内約55%は京都VI期古（12世紀後半～末）に比定することができる。次に京都VI期中（13世紀初頭）が約22%、京都V期新（12世紀半ば）が約14%であった。



第21図 グリッド毎の瓦器出土数  
(縮尺1/400)

11世紀末や13世紀前半～末のものは極めて少なかった。こうしたことから、今回出土した瓦器は、京都V期新～VI期中（12世紀半ば～13世紀初頭）に9割方収まっていることがわかる。

### 3 産地について

産地については、楠葉型・大和型と考えられるものと和泉型のものが出土した。

大半は楠葉型と大和型である。両者に関しては、明確に分類しがたいが、瓦器の年代を見てみると、京都VI期古（12世紀後半～末）のものが大多数を占める。しかし、京都VI期中（13世紀初頭）を過ぎると出土数が激減する。

3mm以上の太いミガキを施す和泉型の瓦器については、出土数は7点とかなり少なく、完形のものはなかった。そのため、年代における特徴については言及はできない。出土の割合については、瓦器全体のうち4.7%であった。

### 4まとめ

以上、瓦器を分類することにより、次のようなことが考えられた。

1. 瓦器の四行八門の区割りによる出土数の差に関しては、今回の調査範囲内の数値上の差は認められた。そのため、この数値を用いて西一行北七門側の方が使用・廃棄が多かったとの推察は可能であろう。しかし、今回の調査地において、西一行北八門に当たる部分の面積は、西一行北七門に当たる面積の半分である。そのため、今回示された数値は見かけ上の数値であり、本調査地の南側が調査されることによって、この結果は変わるべきである。

2. 瓦器の年代としては、調査地が宅地として利用されていたと推定できる時期をメインとし、宅地廃絶後から瓦器の出土が激減していることや完形のものが出土していないことから、今回出土した瓦器の大半は、宅地として利用されていた時期に居住していた人によって、使用・廃棄されたものと考えられる。

3. 産地については和泉型の瓦器が極端に少ないが、京都での和泉型瓦器の出土は少量である。今回の出土の割合についても、今までの調査結果と同じようなものが得られた。

第6表 瓦器の年代と産地

総数(数)	產地同定(数)	產地(数)	年代(数)	京都編年	概本編年
瓦器総数 (230)	楠葉・大和 (141)	可(148)	12世紀半ば(18)	V期新	II-2
			12世紀後半～末(75)	VI期古	II-3
			13世紀初頭(31)	VI期中	III-1
			13世紀前半～半ば(7)	VII期(中～)新	III-2
			13世紀後半(3)	VI期古	III-3
			13世紀末(1)	VI期古	III-4
			不明(6)	—	—
	和泉(7)	和泉	12世紀半ば(2)	V期新	II-2
			12世紀後半～末(2)	VI期古	II-3
			13世紀初頭(1)	VI期中	III-1
			13世紀後半(2)	VI期古	III-3
	不可(82)	—	11世紀末(1)	VI期古	I-2
			12世紀半ば(1)	V期新	II-2
			12世紀後半(4)	VI期古	II-3
			13世紀初頭(1)	VII期中(前半)	III-1
			13世紀前半(1)	VII期中(後半)	III-2
			不明(74)	—	—

### 参考文献

橋本久和 2016 「楠葉産瓦質土器からみた平安末・鎌倉時代」『中近世陶磁器の考古学』 第3巻 雄山閣

## 第6節 結び

今回の調査結果として、条坊区画に規制された宅地として土地利用が行われる前は自然流路が存在した。流路は、平安時代前期～中期頃（10世紀後半～11世紀後半）にかけて緩やかに埋没しているようにみられ、12世紀前半頃までは開発されることはないようである。流路の自然堆積層（第19図参照）を土壤分析した結果として水田耕作を示唆するものであった。ただし、今回の調査においては、水田遺構を示す畦畔等はなかった。この結果から平安時代前期～中期頃において周辺で水田耕作が行われていた可能性が考えられる。そして平安時代後期から鎌倉時代前半（12世紀前半～13世紀前半）頃までが宅地が営まれて利用がされていたと考えられる。鎌倉時代前半を過ぎる頃から宅地としての役割は終わり、それまでの宅地内では土取りなどが行われるようになる。これらの結果は、周辺調査の結果とほぼ同様である。土取り坑は、築地基底部の可能性が考えられる硬化面3003より東で行われており、宅地としての機能が失われた後も、条坊区画については、場所によって制約があったのではないかと考えられる。

大路面遺構とした硬化面2005からも土坑、羽釜埋納遺構、土器溜りなどが検出されている。これは、12世紀後半頃に入ると左京八条城以南において、道路や犬走りなどが宅地化、耕地化する影響なのではないかと考えられる。

なお、羽釜埋納遺構3031の内部から採取した土壤サンプルを分析した結果、イネ、オオムギといった作物、不明の動物遺体等が含まれていた。この結果から何らかの祭祀的行為が行われた可能性が考えられる。

## 付論 自然科学分析

### 第1節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻 康男

#### 1.はじめに

土取り坑 2010 の肩部を構成する遺構検出面基盤層（地山層）中の古土壤について、堆積年代を明らかにするために、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第 7 表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS；NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、曆年代を算出した。

第 7 表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-38750	土取り坑 2010 埋土 肩部の基盤層中の古土壤（4 層）	種類：土壤 状態：wet	湿式分離：106 $\mu\text{m}$ 酸・アルカリ・酸洗浄 (塗酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 硝酸：1.2mol/L)

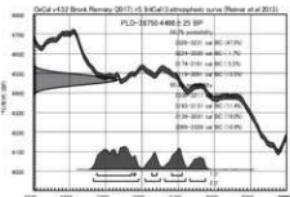
#### 3. 結果

第 8 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代、第 22 図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下 1 衍を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行るために記載した。

$^{14}\text{C}$  年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

第 22 図 曆年較正結果



第 8 表 花粉分析試料一覧

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 曆年代範囲	2 $\sigma$ 曆年代範囲
PLD-38750 4 層	$22.31 \pm 0.13$	$4466 \pm 25$	$4465 \pm 25$	3326-3231 cal BC (47.5%) 3224-3220 cal BC (1.7%) 3174-3161 cal BC (5.5%) 3119-3091 cal BC (13.5%)	3336-3211 cal BC (54.2%) 3193-3151 cal BC (11.4%) 3139-3081 cal BC (19.0%) 3069-3026 cal BC (10.9%)

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正には0xCal4.3(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

#### 4. 考察

試料採取層準の模式柱状断面図を第23図に示す。土取り坑2010埋土の肩部の基盤層の「4層」は、腐植を多く含むものの、未分解の植物遺体の挟在が認められない塊状無層理の泥層である。このような「4層」の層相からは、古土壤と判断される。本層は、遺構検出面の下位に累重する基盤層(地山層)である。

年代測定の結果、古土壤の「4層」を構成する腐植からは、3336-3026 cal BCの暦年代較正値が得られた。工藤(2012)、小林(2017)を参照すると、本年代値は、縄文時代中期中葉に相当する。

古土壤の「4層」は、黄褐色の碎屑物主体の浮遊洪积堆積物の泥層の「3層」に薄く覆われる。この「3層」の上面付近が遺構検出面に相当する。発掘調査段階では、遺構検出面基盤層すなわち地山層について、「3層」を「地山1層」、「4層」を「地山2層」として認識して調査を行っていた。また、「4層」の下位には、砂質の堆積層が累重するとのことである。上記のような堆積状況から、「4層」は、遺構検出面から比較的浅い深度での埋没が確認できる。この層序をふまえると、調査区とその近傍の氾濫原では、縄文時代中期中葉頃に既に土壤生成が卓越する地表環境下にあったと推測される。さらに、縄文時代中期中葉頃以降には、氾濫原の活発な埋積がほとんど生じていなかったと解釈される。また、併せて分析を行っているプラント・オパール分析では、「4層」において乾燥した土地条件を好むネザサ節型が主とするタケ亜科が多産しており、上記した層相および年代値にもとづく解釈とも整合的である。

以上のことから、今回の調査区付近の氾濫原では、縄文時代中期中葉頃以降からある時期までの長期間にわたって、かなり安定した地表付近で好気的状態が維持される堆積・土壤環境が継続していたと推定される。

このような安定した地表環境は、どの時代まで継続したか、調査区付近の土地利用とも密接に関係するが、現段階において地質学的な情報がほとんど得られていない。ただし、調査区の堆積



第23図 調査区の堆積模式柱状断面図

状況をふまえると、少なくとも古代には、「4層」の古土壤を被覆もしくは侵食して、洪水や流域堆積物が堆積するような状況下にあったと考えられる。

なお、「4層」の古土壤については、周辺の調査区での検出が予想され、基本層序の鍵層として利用できる可能性がある。ただし、報告者は、現段階において、この古土壤の分布や堆積状況についての情報収集を行っていない。この点は今後の課題である。

## 参考文献

- (1) Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337–360.
- (2) 小林謙一 (2017) 繩紋時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—. 263p, 同成社.
- (3) 工藤雄一郎 (2012) 後氷期の考古編年と<sup>14</sup>C年代. 工藤雄一郎「旧石器・縄文時代の環境文化史」: 212–229, 新泉社.
- (4) 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」: 3–20, 日本第四紀学会.
- (5) Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869–1887.

## 第2節 プラント・オパール分析

森 将志（株式会社バレオ・ラボ）

### 1. はじめに

調査区で採取された遺構検出面基盤層と、古代の自然流路内の堆積層についてプラント・オパール分析を行い、栽培種のイネの産状にもとづく土地利用と、イネ科植物相について検討した。

### 2. 試料と方法

分析試料は、古代のトレンチ1断面の11層から採取された1試料（試料1とする）と、土取り坑2010埋土の肩部の基盤層の4層（試料2とする）から採取された1試料の、計2点である（第9表）。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

第9表 分析試料一覧

試料番号	位置	層位	時期	岩質	備考
試料1	トレンチ1	11層	古代	灰オリーブ色(5Y4/2)シルト	水田耕作土?
試料2	土取り坑2010肩部	4層	-	黒褐色(10YR2/2)シルト	氾濫原層中の古土壤

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールピーカーにとり、約0.02gのガラスピース（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜ブレペラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスピースが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第24図に載せた。

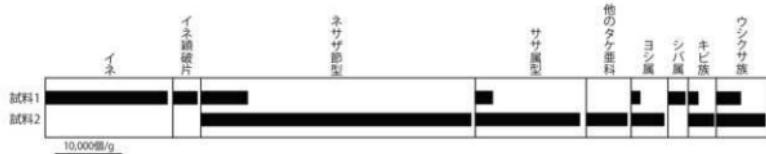
### 3. 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピース個数の比率から試料1g当たりの各プラント・オパール個数を求め（第10表）、分布図に示した（第24図）。

2試料の検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネサザ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪

第10表 試料1g当りのプラント・オパール個数

試料	イネ (個/g)	イネ類 破片 (個/g)	ネサザ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	他の タケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	ポイント型 珪酸体 (個/g)
試料1	16,000	3,400	6,800	2,300	0	1,100	2,300	13,500	3,400	0
試料2	0	0	40,100	15,300	5,900	4,700	0	15,300	7,100	1,200



第24図 植物珪酸体分布図

酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の8種類の機動細胞珪酸体の产出が確認できた。また、イネの穀殻で形成される珪酸体の破片（イネ穎破片）やポイント型珪酸体も产出している。なお、イネ機動細胞珪酸体とイネ穎破片の产出が確認されたのは、試料1のみである。

#### 4. 考察

まず、調査区の遺構検出面基盤層中の古土壤の試料2から見ると、イネ機動細胞珪酸体は検出されず、ネザサ節型をはじめ、ササ属型などのタケ亜科の機動細胞珪酸体が多く产出している。よって、試料2の堆積時にはネザサ節を主体としたタケ亜科のササ類が分布を広げていたと思われる。また、抽水植物であるヨシ属の機動細胞珪酸体の产出も見られ、試料採取地点付近には、湿地的環境も存在し、ヨシ属が生育していた可能性がある。ただし、ヨシ属の産状からは、その広がりが小さかったか、分析地点から離れた場所に存在していたと推測される。その他にはキビ族やウシクサ族の機動細胞珪酸体の产出が見られ、試料採取地点の周辺にキビ族やウシクサ族も生育していたと思われる。

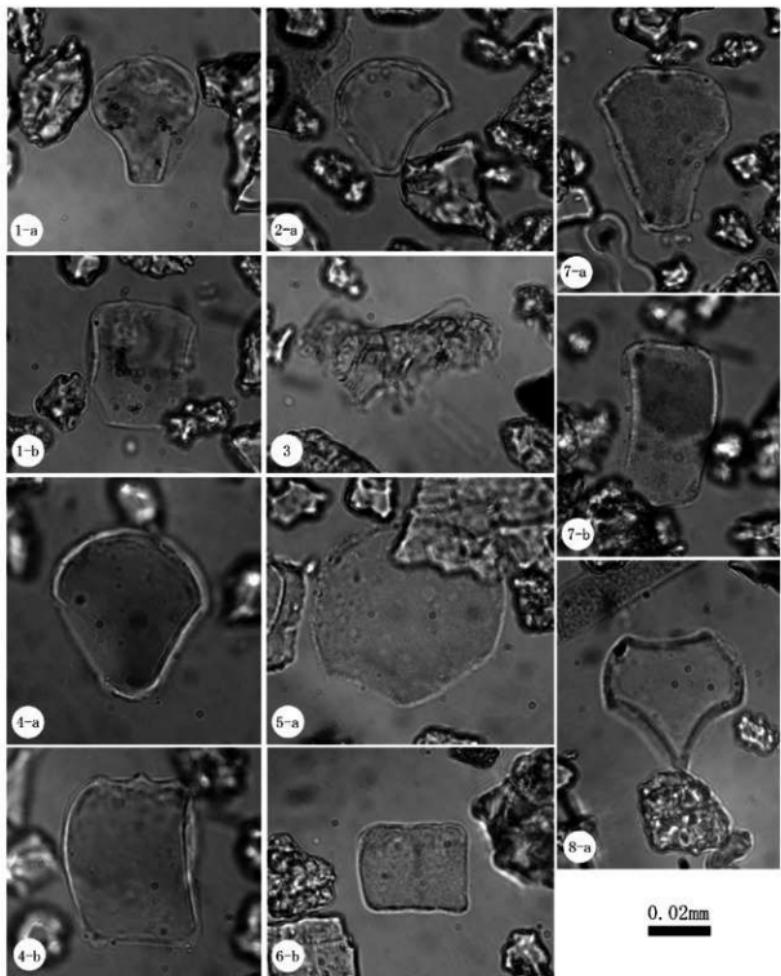
古代の試料1では、イネ機動細胞珪酸体やイネ穎破片の产出が確認された。イネ機動細胞珪酸体の产出量については、試料1g当り5,000個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており（藤原、1984）、試料1g当り5,000個が水田土壤か否かを判断する目安とされている。この目安に照らし合わせると、試料1のイネ機動細胞珪酸体の产出量は水田土壤の目安を大幅に超える。このことから、試料1の分析地点もしくはその近傍では、水田の存在が示唆される。

ただし、今回の発掘調査では、古代の水田畦畔や水路などの遺構が検出されていない。さらに、試料1の採取地点は、自然流路に位置しており、その凹地を埋積させる泥層である可能性が発掘調査結果から推測されている。このため、試料1でのイネの由来は、水田耕作土に由来するものではなく、凹地に廃棄された稻藁など人間の生活残滓にも想定される。また、分析地点は、周囲からの流れ込みが予想される層相および堆積状況である。このため、試料1に含まれるイネは、近傍の水田から再堆積物の可能性もある。現段階では、本調査区とその周辺での古代の土地利用や微地形などの検討が進んでおらず、試料1に含まれるイネの由来の詳細を言及できない。

なお、イネ以外では、ネザサ節型やササ属、ヨシ属、キビ族、ウシクサ族といった試料2で产出した分類群の产出が確認できるが、いずれも产出量が減少している。水田開発に伴い、試料採取地点の周辺に生育するイネ科植物の分布が縮小した可能性がある。代わって試料1で产出量が増加するのがシバ属である。このシバ属の増加からは、分析地点周辺において、古代に人為的な地表擾乱が強まっていた可能性がうかがえる。

#### 引用文献

- (1) 藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—、考古学ジャーナル、227、2-7。



- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| 1-a. イネ機動細胞珪酸体    | 1-b. イネ機動細胞珪酸体     |
| 2-a. イネ機動細胞珪酸体    | 3. イネ類破片           |
| 4-a. ネザサ節型機動細胞珪酸体 | 4-b. ネザサ節型短機動細胞珪酸体 |
| 5-a. ヨシ属機動細胞珪酸体   | 6-b. キビ族機動細胞珪酸体    |
| 7-a. ウシクサ族機動細胞珪酸体 | 7-b. ウシクサ族機動細胞珪酸体  |
| 8-a. シバ属機動細胞珪酸体   | 8-b:断面 b:側面        |

第25図 植物珪酸体写真

### 第3節 羽釜埋納遺構 3031 から出土した羽釜内堆積物の内容物

パンダリ スダルシャン・山本 華（バレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

羽釜埋納遺構 3031 では、逆さになった 12 世紀後半から 13 世紀初頭の羽釜が検出された。この羽釜内の堆積物を水洗して、微細な遺物や種実などの大型植物遺体などの内容物を調査した。

#### 2. 試料と方法

試料は、遺構番号 3031 から出土した羽釜の中の堆積物 1 試料で、発掘担当者によって採取された。試料の水洗は、堆積物試料 200cc について最小 0.5mm 目の篩を用いて行った。水洗は、バレオ・ラボにて行った。

炭化種実の同定および計数は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。計数が困難な分類群については、およそその点数を (+) で示した。

#### 3. 結果

同定した結果、草本植物のイネ炭化穂殼・炭化小穂軸・炭化種子(穎果)とオオムギ炭化種子(穎果)の 2 分類群が見いだされた。不明の動物遺体と炭化材については、同定の対象外とした(第 11 表)。

次に、大型植物遺体の記載を行い、第 26 図に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名や順番については米倉・梶田(2003-) に準拠し、APG III リストの順とした。

(1) イネ *Oryza sativa* L. 炭化穂殼・炭化小穂軸・炭化種子(穎果) イネ科

炭化穂殼は、完形ならば上面観が楕円形で、側面観が長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長 2.5mm、残存幅 0.7mm。炭化小穂軸は、肥厚する果柄を中心にわずかに残る。残存長 0.8mm、残存幅 0.7mm。炭化種子(穎果)は、完形ならば上面観が両凸レンズ形、側面観が楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の 2 本の浅い溝がある。残存長 3.0mm、幅 1.8mm。

(2) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子(穎果) イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る 1 本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面は楕円形。長さ 5.1mm、幅 3.0mm、厚さ 2.1mm。

#### 4. 考察

鳥丸町遺跡の羽釜埋納遺構 3031 出土の羽釜の中の堆積物から抽出した炭化種実を同定した結果、イネとオオムギがわずかに検出された。イネとオオムギは、いざれも「五穀」に含まれる作

第 11 表 鳥丸町遺跡から出土した炭化種実

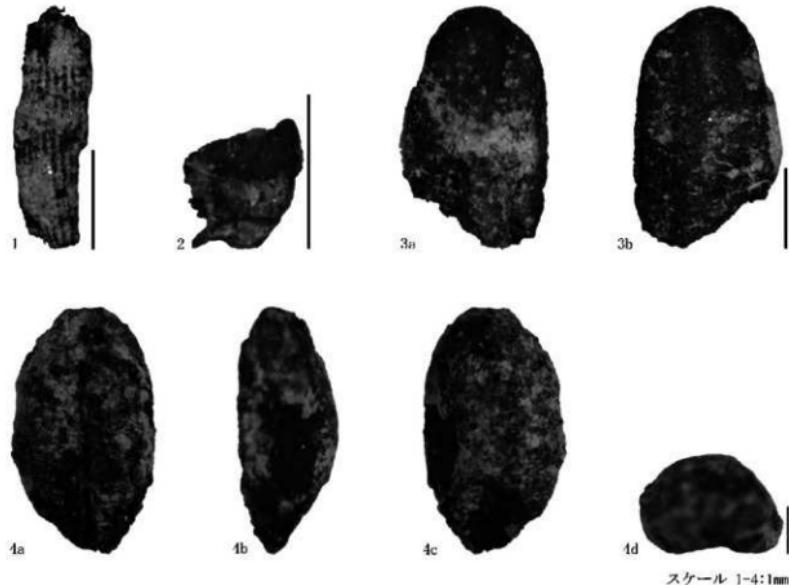
分類群	採取位置	遺構番号 3031	
		時期	不明
イネ	水洗量 (cc)	200	
	炭化穂殼	(3)	
	炭化小穂軸	1	
	炭化種子	1(5)	
オオムギ	炭化種子	1	
不明	炭化材	(++)	
不明	動物遺体	(+)	

(括弧内は破片数)

物である。その他に、微細な破片ながら、不明の動物遺体と炭化材も得られた。これらは、人為的に羽釜に入れられた可能性もある一方、羽釜が割れているために、周囲から堆積物などと一緒に混入した可能性もある。また、炭化種実のうち食用可能な部位については、調理中に炭化して残存した可能性もあるが、食用としない部位も含まれていた。これらのことから、今回羽釜内から検出された炭化種実や動物遺体が、人間によって意図的に入れられたのか、埋積過程で流入したのかについては、分析結果からのみでは判断できない。

#### 引用文献

- (1) 米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名－学名インデックス (YList), <http://ylist.info>



1. イネ炭化初穀、2. イネ炭化小穂軸、3. イネ炭化種子(穎果)、4. オオムギ炭化種子(穎果)

第 26 図 羽釜埋納遺構 3031 から出土した炭化種実

## 第4節 樹種同定

小林克也（株式会社パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

出土した木製品の樹種同定を行なった。

### 2. 試料と方法

試料は、自然流路 3002 から出土した毬杖球の可能性のある木質遺物 1 点である。試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

### 3. 結果

同定の結果、不明木製品は広葉樹のコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）であった。同定結果を第 12 表に示す。

第 12 表 出土木製品の樹種同定結果

試料 No.	遺物 No.	遺構番号	器種	樹種	木取り
1	242	自然流路 3002	毬杖球？	コナラ属アカガシ亜属	芯持削出

以下に、同定された材の特徴を記載し、第 27 図に光学顕微鏡写真を示す。

(1) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第 27 図 1a-1c (No. 1)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

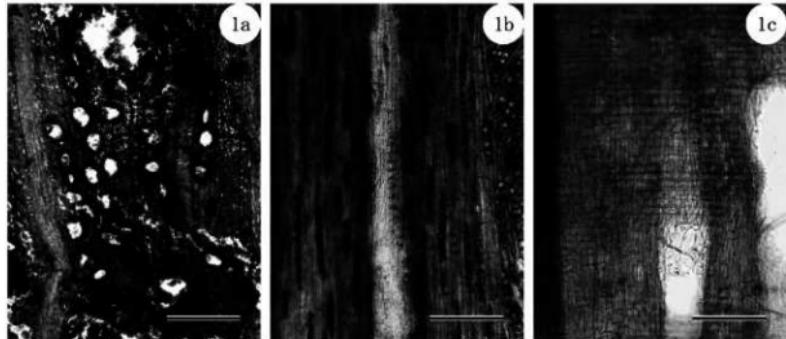
コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強韌で、耐水性があり、切削加工は困難である。

### 4. 考察

毬杖球の可能性のある木質遺物（遺物 No. 242）は、アカガシ亜属であった。アカガシ亜属は非常に堅硬な材であり（伊東ほか, 2011）、毬杖の際に敲いて使用される毬杖球には、堅硬な樹種が選択されていたと考えられる。なお、国内での平安時代～江戸時代頃の毬杖球（毬）の樹種同定では、マツ属複維管束亜属やサカキ、カキノキ属などの比較的堅硬な樹種が多く利用されており、アカガシ亜属は三重県の荘跡から出土した、鎌倉時代～室町時代頃の毬で確認されている（伊東・山田編, 2012）。

## 引用文献

- (1) 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳 (2011) 日本有用樹木誌, 238p, 海青社.
- (2) 伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース—, 449p, 海青社.



1a-1c. コナラ属アカガシ亜属(No. 1)

a:横断面(スケール=500  $\mu\text{m}$ )、b:接線断面(スケール=200  $\mu\text{m}$ )、c:放射断面(スケール=200  $\mu\text{m}$ )

第 27 図 平安京左京九条四坊二町跡・烏丸町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

## 第5節 土師器付着物の材質分析

藤根 久 (株式会社パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

出土した土師器の中には、内面あるいは外面に漆質物が付着している土師器がみられた。ここでは、これらの土師器付着物の材質を調べた。

### 2. 試料と方法

分析試料は、土師器の付着物4点である(第13表)。なお、分析No.2は、色調の異なる付着物2種類が見られたため、2種類とも分析した。

第13表 分析試料とその詳細

分析No.	遺物名	時期	対象	遺物No.	試料No.	付着物の特徴
1	土師器皿		内面付着物	3692-119	5	暗褐色(10YR 3/4)、光沢有、線状肥厚
2	土師器皿	10世紀前半～11世紀初頭	内面付着物	3693-85-1	20	暗褐色(2.5Y 5/3)と黒褐色(10YR 2/3)、光沢有、縮み皺有、黄褐色部が後染り
3	土師器皿		外面付着物	3693-114-2	21	黒色(N 1.5/1)、外側で光沢有、肥厚、縮み皺有
4	土師器皿		外面付着物	2064-160	-	黒色(N 1.5/1)、外側で光沢無

赤外分光分析は、手術用メスを用いて付着物表面から薄く削り取り、厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に押しつぶして挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光(株)製FT/IR-410, IRT-30-16)を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

分析No.2の付着物は、黄褐色と黒褐色の色調の異なる付着物が重なって見られたため、1mm角程度を採取して、断面の元素マッピングを行った。

試料は、カーボンコーティング(マイワフォース株式会社製CADE)を用いて炭素蒸着を行った。

元素マッピング分析は、エネルギー分散型X線分析装置(株式会社キーエンス製VE9800+オックスフォード・インストゥルメンツ株式会社製AZtecOneシステム)を使用した。測定条件は、加速電圧20kV、X線取り出し角度16度、プロセスタイム6、スポットサイズ14、ワークディスタンス(WD)30mm、試料台の傾斜角15度である。

### 3. 結果および考察

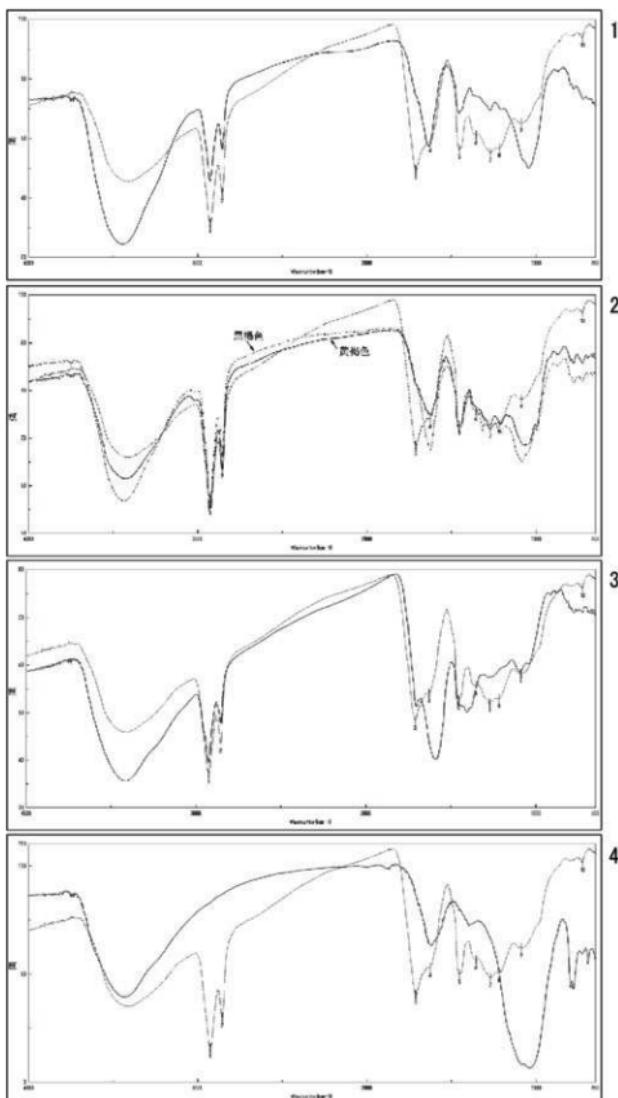
以下に、各試料の赤外分光分析の結果について述べる。なお、赤外吸収スペクトル図の縦軸は透過率(%R)、横軸は波数(Wavenumber ( $\text{cm}^{-1}$ ))；カイザー)を示す。また、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の主な赤外吸収位置(表14表)を示す。

[No.1 (内面付着物)]

付着物は、光沢のある暗褐色(10YR 3/4)で、線状に肥厚する。

第14表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		
	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ケイオール
7	1270.86	46.3336	ケイオール
8	1218.79	47.5362	ケイオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	



1. 土師器と内面付着物（分析 No. 1） 2. 土師器と内面付着物（分析 No. 2）  
3. 土師器と外表面付着物（分析 No. 3） 4. 土師器と外表面付着物（分析 No. 4）

第28図 付着物の赤外分光スペクトル図  
(縦軸が透過率(%)、横軸が波数(Wavenumber  $\text{cm}^{-1}$ ) ; カイザー)

赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収（吸収 No. 7 と No. 8）が認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致した（第 28 図-1）。以上の結果から、漆と考えられる。

[No. 2（内面付着物）]

付着物は、光沢が有る黄褐色（2.5Y 5/3）と黒褐色（10YR 2/3）の 2 種類が見られ、黄褐色部が後塗りである。なお、黄褐色には著しい縮み皺がみられる。

赤外分光分析では、黄褐色と黒褐色の両者とも、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収（吸収 No. 7 と No. 8）が認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致した（第 28 図-2）。以上の結果から、漆と考えられる。なお、黒褐色の付着物では、 $1317(\text{cm}^{-1})$  附近に、水酸化カリウム（KOH）などに見られる吸収が見られた。また、元素マッピング分析では、黒褐色の付着物でカリウム（K）がやや高い輝度を示した。その他の無機元素では、違いが見られなかったため、カリウムを含む顔料（染料または無機顔料）が混入されていたと考えられる。

[No. 3（外面付着物）]

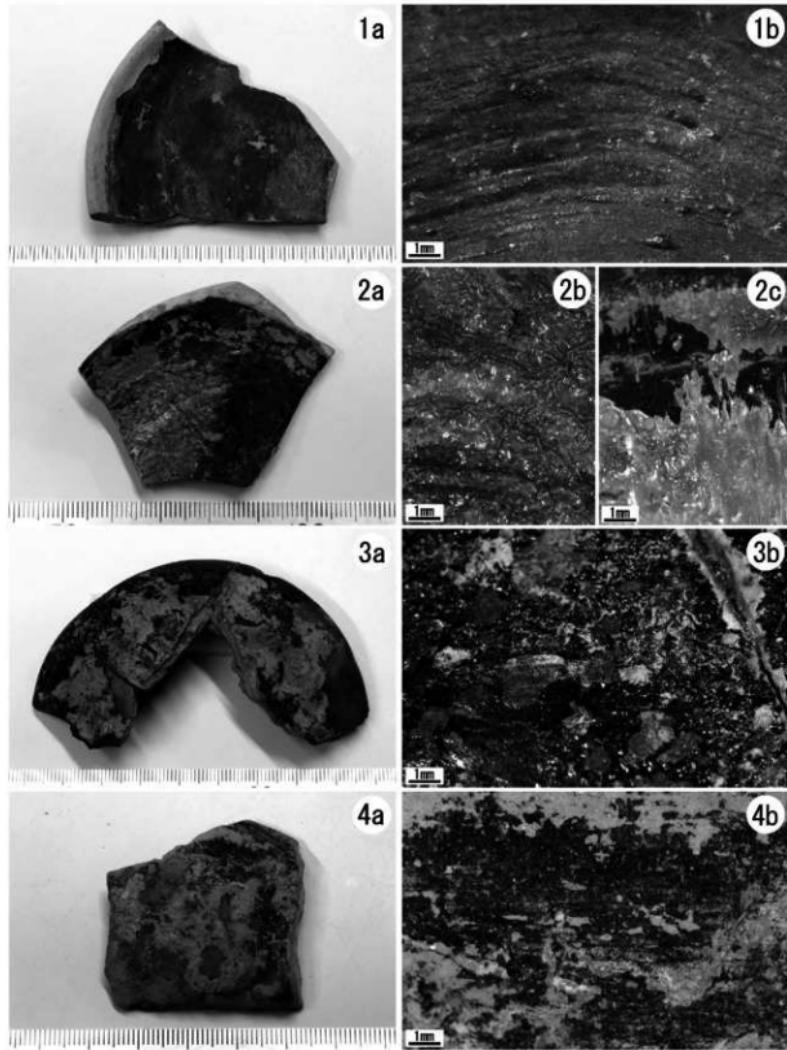
内面と外面の両面に黒色（N 1.5/）の付着物が見られ、外面の付着部は光沢があり、肥厚して、縮み皺が見られる。

赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収（吸収 No. 7）が認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致した（第 28 図-3）。以上の結果から、漆と考えられる。

[No. 4（外面付着物）]

付着物は、外面と内面の両面に黒色（N 1.5/）の付着物が見られる。なお、内面でやや光沢があるが、外面では光沢が無い。

赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No. 6 ~ No. 8）が認められなかった。また、炭化水素の吸収（吸収 No. 1 と No. 2）も見られなかった（第 28 図-4）。なお、吸収 No. 9 附近に、劣化に伴うゴム質の大きな吸収が見られた。以上の結果から、劣化した漆の可能性が考えられる。

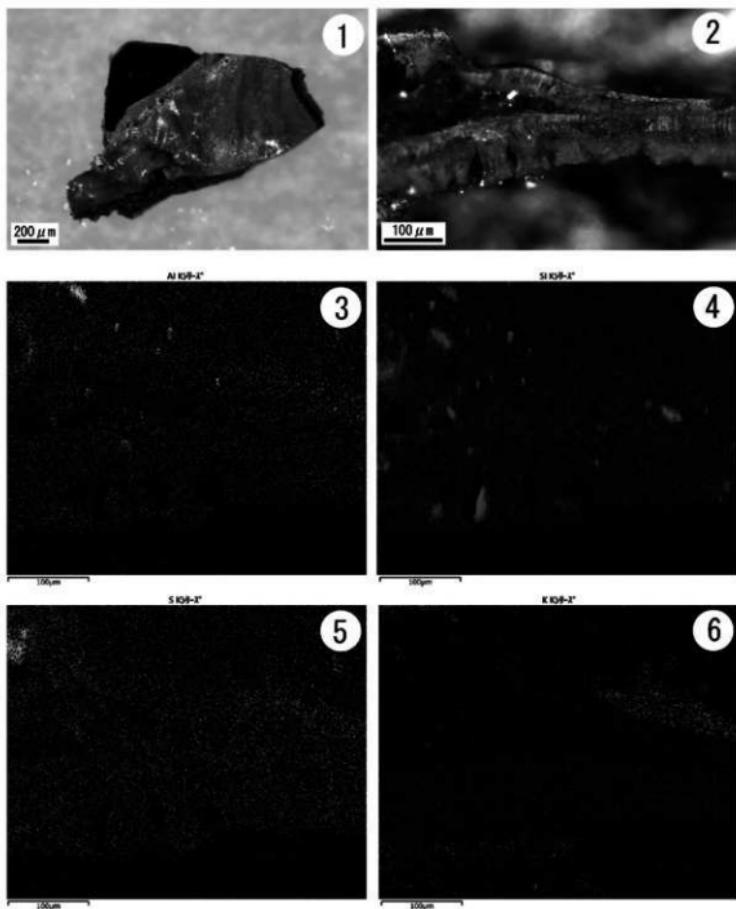


1a-1b. 土師器と内面付着物（分析 No. 1）

2a-2c. 土師器と内面付着物（分析 No. 2、b: 黄褐色、c: 黒褐色）

3a-3b. 土師器と外面付着物（分析 No. 3） 4a-4b. 土師器と外面付着物（分析 No. 4）

第29図 土師器と付着物の実態顕微鏡写真



1. 内面付着物（分析 No. 2） 2. 同断面 3. アルミニウム (Al) のマッピング図  
 4. ケイ素 (Si) のマッピング図 5. イオウ (S) のマッピング図  
 6. カリウム (K) のマッピング図

## 第6節 出土土器付着の赤色顔料の蛍光X線分析

竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

出土した土器に付着する赤色顔料について、蛍光X線分析を行い、顔料の種類を検討した。

### 2. 試料と方法

分析対象は、整地層より出土した土器1点の底部内面に付着する赤色顔料である（第32-1～3）。土器の時期は、12世紀と考えられている。実体顕微鏡下で、セロハンテープに赤色部分を極微量採取し、分析試料とした。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である株式会社堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウム（Rh）ターゲット、X線ビーム径が $100\text{ }\mu\text{m}$ または $10\text{ }\mu\text{m}$ 、検出器は高純度Si検出器である。検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）であるが、ナトリウム、マグネシウム（Mg）といった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪い。

本分析での測定条件は、管電圧が50kV、管電流自動設定、測定時間500s、ビーム径 $100\text{ }\mu\text{m}$ に設定した。定量分析は、標準試料を用いないFP法による半定量分析を行った。

さらに、蛍光X線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

### 3. 結果

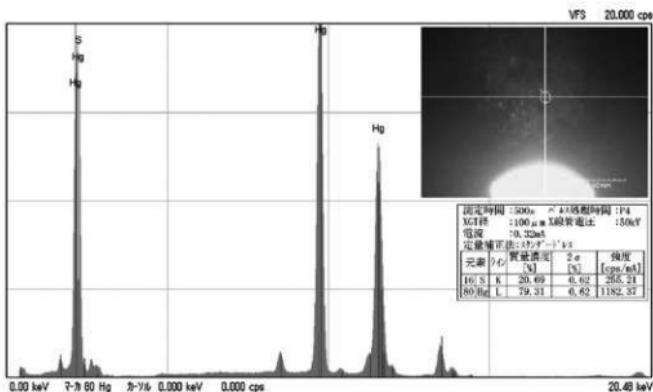
分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を第31図に示す。

試料からは、水銀（Hg）と硫黄（S）が検出された。また、生物顕微鏡観察により得られた画像を、第32図-4に示す。

### 4. 考察

赤色顔料の代表的なものとしては、朱（水銀朱）、鉛丹、ベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。鉛丹は四酸化三鉛（Pb<sub>3</sub>O<sub>4</sub>）で、人工顔料である。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（III）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬, 2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約 $1\text{ }\mu\text{m}$ のパイプ状の粒子形状からなるものが多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており（岡田, 1997）、鉄バクテリア起源の含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬, 1998）。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

今回分析した試料からは、水銀と硫黄のみが検出され、赤色部分は水銀朱と判明した。他の元素は検出されなかつたため、純度が高いといえる。顕微鏡観察では、 $10\text{ }\mu\text{m}$ を超えるような粒子もみられ、やや粗い。



第31図 赤色顔料の蛍光X線分析結果

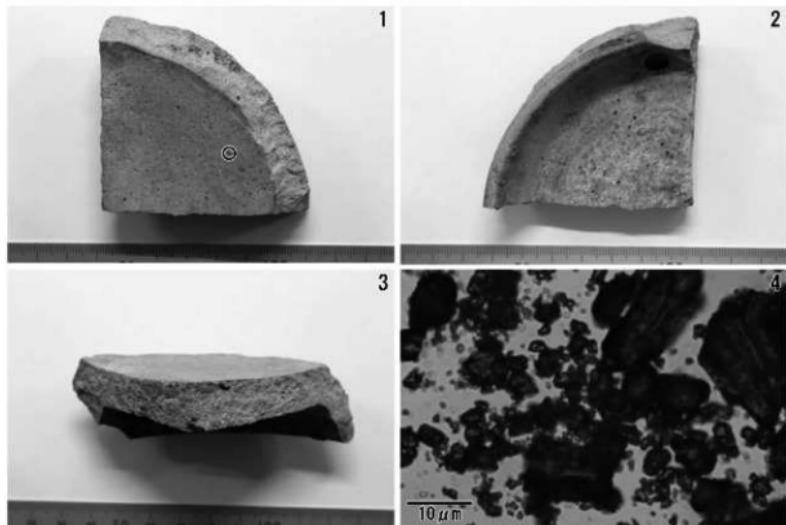
赤色顔料は、土器底面には付着が認められないものの、断面の一部には付着している（第32図-2, 3）。使用している段階で亀裂が入ったか、既に割れた状態で使用されていたと推定される。

## 5. おわりに

鳥丸町遺跡より出土した土器の底部内面に付着する赤色顔料について分析した結果、水銀朱と確認された。

## 引用文献

- (1) 成瀬正和 (1998) 繩文時代の赤色顔料 I—赤彩土器—. 考古学ジャーナル, 438, 10-14, ニューサイエンス社.
- (2) 成瀬正和 (2004) 正倉院宝物に用いられた無機顔料. 正倉院紀要, 26, 13-61, 宮内庁正倉院事務所.
- (3) 岡田文男 (1997) バイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本国文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39.



1. 土器内面および試料採取位置 2. 土器底面 3. 土器断面 4. 生物顕微鏡写真

第32図 赤色顔料付着状況（○は試料採取位置）および採取赤色顔料の生物顕微鏡写真

第15表 出土遺物観察表

遺物番号	遺物番号	器種	器形	法量(cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	周長	底径	外面	内面		
1	自然洗路 3002	土師器	皿	(8.4)	1.7	5.2	クロナダ、 回転糸切瓶	クロナダ	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	
2	自然洗路 3002	土師器	皿	8.2	1.3	8.8	ヨコナダ、 ナダ	ヨコナダ、 ナダ	に凹、黄褐色	
3	自然洗路 3002	土師器	皿	(9.2)	1.6	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	外:浅黄褐色 内:褐色	内面に塗?
4	自然洗路 3002	土師器	皿	9.4	1.8	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	灰白色	
5	自然洗路 3002	土師器	皿	9.6	1.7	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	浅黄褐色	
6	自然洗路 3002	土師器	皿	(14.3)	2.4	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	浅黄褐色	
7	自然洗路 3002	土師器	皿	14.6	2.6	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	淡黄色	
8	自然洗路 3002	土師器	皿	15.0	3.0	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	淡黄色	
9	自然洗路 3002	土師器	羽釜	(23.6)	[7.4]	-	ヨコナダ、 オサエ、ハ ケ目	ヨコナダ、 ナダ	外:灰黄褐色 内:浅黄色	
10	自然洗路 3002	須恵器	瓶	-	[8.7]	(11.8)	クロナダ、 回転糸切瓶	クロナダ	黒色	高台に粒状痕
11	自然洗路 3002	白色土器	瓶	9.1	2.8	3.5	クロナダ、 回転・ラケ ズリ、回転 糸切瓶	クロナダ	灰白色	
12	自然洗路 3002	瓦質土器	盤	(48.8)	[10.8]	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗灰色	
13	自然洗路 3002	瓦質土器	盤	(57.0)	[9.6]	-	ヨコナダ	ヨコナダ	黄灰色	外面部に擦痕痕
14	自然洗路 3002	白磁	瓶	(15.6)	[4.9]	-	クロナダ、 回転・ラケ ズリ、回転 糸切瓶(下部 漏斗)	クロナダ、 施釉	袖:灰白色	
15	自然洗路 3002	白磁	瓶	(16.6)	[5.0]	-	クロナダ、 施釉(下半 漏斗)	クロナダ、 施釉	灰白色	
16	自然洗路 3002	白磁	碗	-	[2.7]	6.5	回転・ラケ ズリ、施釉 (高台露胎)	クロナダ、 回転・ラケ ズリ、施釉	灰白色	
17	自然洗路 3002	石製品	石縫	(7.8)	[3.6]	(6.4)	ノミ瓶	ノミ瓶	黄灰色	滑石製
18	自然洗路 3002	木製品	櫛枝球 小	幅 3.3	高さ 3.8	厚み 1.8	ケズリ	-	-	
19	進み 3078	土師器	皿	14.9	3.1	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	
20	進み 3078	土師器	瓶	(15.6)	[4.7]	-	クロナダ	クロナダ	灰白色	外面部に煤付着
21	進み 3078	須恵器	甕	(20.0)	[10.6]	-	クロナダ、 タタキ	クロナダ、 指オサエ	灰白色	
22	進み 3078	陶器	甕	-	[8.8]	-	クロナダ	クロナダ	外:灰白色 内:灰褐色	旅投産の三筋甕か
23	硬化面 3005	土師器	皿	(9.2)	1.3	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	浅黄褐色	
24	硬化面 3005	土師器	皿	(10.1)	1.6	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	浅黄褐色	
25	硬化面 3005	土師器	皿	10.1	1.7	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	淡黄色	
26	硬化面 3005	土師器	皿	14.4	2.6	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	浅黄褐色	
27	硬化面 3005	土師器	皿	(14.9)	2.4	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	外:灰白色 内:浅黄褐色	
28	硬化面 3005	須恵器	小瓶	(10.0)	[5.1]	-	ヨコナダ	ヨコナダ	暗灰色	
29	硬化面 3005	山茶輪	碗	-	[3.3]	7.4	クロナダ、 回転糸切瓶、 貼付高台	クロナダ	外:灰白色 内:オリーブ色	尾張型3型式 転用碗
30	硬化面 3005	山茶輪	碗	-	[4.4]	(8.6)	クロナダ、 回転・ラケ ズリ、回転 糸切瓶、 貼付高台	クロナダ	外:灰白色 内:浅黄色	尾張型4型式
31	硬化面 3005	山茶輪	碗	-	[4.4]	8.4	クロナダ、 回転糸切瓶、 貼付高台	クロナダ	灰白色	尾張型4型式
32	硬化面 3005	山茶輪	皿	(10.6)	3.1	4.7	クロナダ、 回転・ラケ ズリ、回転 糸切瓶、 貼付高台	クロナダ	外:灰白色 内:オリーブ黄色	尾張型4型式
33	硬化面 3005	瓦器	皿	(10.0)	2.5	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ヘラミガキ	灰白色	
34	硬化面 3005	白磁	碗	(15.2)	[4.7]	-	回転・ラネ ザ、白磁	回転・ラネ ザ、白磁	袖:灰白色	

器物 番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			測定・成型		色調	備考
				口径	四面	底径	内面			
35	硬化面 3065	白磁	碗	-	[3.9]	(6.0)	削出・高台、 白磁釉 (高 台部露胎)	沈線、白磁 釉	釉: 灰白色	
36	硬化面 3065	白磁	小碗	(11.6)	3.1	(5.4)	削出・高台、 白磁釉 (高 台部露胎)	回転ヘラク ズリ、白磁 釉	釉: 灰白色	
37	硬化面 3065	白磁	皿	-	[1.3]	2.8	削出・高台、 白磁釉 (高 台部露胎)	回転ヘラク ズリ、白磁 釉	釉: 灰白色	外面底部に墨書きあり。 「丸●」
38	硬化面 3065	青白磁	皿	-	[1.5]	(4.0)	削出・高台、 青白磁釉 (高 台部露胎)	青白磁釉	釉: 灰白色	
39	硬化面 3064	土師器	皿	9.8	1.9	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	外: 淡黄褐色 内: 灰白色	
40	硬化面 3064	須恵器	鉢	-	[4.9]	(10.2)	ヨコナダ	ヨコナダ、 ナダ	外: 灰白色 内: 淡黄褐色	内面から断面にかけて 煤付着
41	漢 3003	土師器	皿	(9.0)	1.1	-	ヨコナダ、 ナダ	ヨコナダ、 ナダ	褐色	
42	漢 3003	土師器	皿	(10.2)	1.2	-	ヨコナダ、 ナダ	ヨコナダ、 ナダ	褐色	
43	漢 3003	土師器	皿	(8.6)	1.2	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	外: 灰白色 内: 黒色	内面に擦?
44	漢 3003	土師器	皿	9.6	1.4	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	淡黄褐色	
45	漢 3003	土師器	皿	9.6	(1.7)	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	焦褐色	全体的に黒化
46	漢 3003	土師器	皿	9.6	1.8	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	淡黄褐色	
47	漢 3003	土師器	皿	(14.0)	2.2	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	外: 黑褐色 内: 灰白色	内面が黒化
48	漢 3003	土師器	皿	14.3	2.6	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	灰白色	
49	漢 3003	土師器	甕	(19.6)	[6.3]	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ	外: 黑褐色 内: 淡黄褐色	
50	漢 3003	山茶瓶	皿	(11.6)	2.7	(7.0)	クロナダ、 回転ヘラク ズリ、貼付高台	ロクナダ、 自然釉	外: 灰白色 内: 淡オーブ色	尾張型4型式
51	漢 3003	瓦器	碗	(13.8)	5.3	6.0	ヨコナダ、 ヘラクガキ、 貼付高台	ヨコナダ、 ナダ、ヘラ クガキ	外: オリーブ黒色 内: 黑色	
52	漢 3003	瓦器	碗	(14.6)	4.7	(5.3)	ヨコナダ、 ヘラクガキ、 貼付高台	ヨコナダ、 ナダ、ヨコ ヘラクガキ	外: オリーブ黒色 内: 黑色	
53	漢 3003	瓦器	碗	(15.0)	5.3	4.5	ヨコナダ、 ヘラクガキ	ヨコナダ、 ナダ、ヘラ クガキ	黑色	
54	漢 3003	瓦器	碗	(14.1)	5.9	5.4	ヨコナダ、 ナダ、ヘラ クガキ	ヨコナダ、 ナダ、ヘラ クガキ	外: 黑色 内: オリーブ黒色	
55	漢 3003	瓦器	碗	-	[2.5]	5.3	ナダ、オサ エ、貼付高 台	ナダ、ヘラ クガキ	褐色	
56	漢 3003	瓦質土器	盤	(41.5)	10.0	-	ヨコナダ、 オサエ、貼 付高台	ヨコナダ、 ナダ、ヘラ クガキ	黑色	
57	羅敷 3039* 3040	土師器	皿	(10.0)	1.0	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	内: 淡黄褐色	
58	羅敷 3039* 3040	土師器	皿	(9.6)	1.7	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	内: 淡黄褐色	
59	羅敷 3039* 3040	土師器	皿	9.8	1.7	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	内: 淡黄褐色	
60	羅敷 3039* 3040	土師器	皿	(13.6)	2.1	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	灰白色	
61	羅敷 3039* 3040	土師器	皿	(14.4)	2.3	-	ヨコナダ、 ナダ	ヨコナダ、 ナダ	淡黄褐色	
62	羅敷 3039* 3040	須恵器	鉢	(34.0)	[5.0]	-	クロナダ	クロナダ	灰褐色	東播系
63	羅敷 3039* 3040	須恵器	不明	-	2.5	(10.0)	クロナダ、 ヘラクガキ	クロナダ	外: 淡黄褐色 内: 灰褐色	
64	羅敷 3039* 3040	山茶瓶	碗	-	2.7	7.8	クロナダ、 回転ヘラク ズリ、貼付高台	クロナダ	灰白色	尾張型4型式
65	龜石 1608	瓦質土器	羽皿	(25.0)	[3.0]	-	ヨコナダ、 貼付ナダ	ヨコナダ、 ナダ	暗灰色	
66	土坑 3066	土師器	鉢	17.6	13.5	6.2	ナダ、オサ エ	オサエ	灰白色	
67	土器皿 3001	土師器	皿	8.3	1.4	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	淡黄褐色	
68	土器皿 3001	土師器	皿	9.2	1.7	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	灰白色	
69	土器皿 3001	土師器	皿	9.4	1.6	-	ヨコナダ、 オサエ	ヨコナダ、 ナダ	淡黄褐色	

遺物 番号	遺構番号	器種	器形	法量 (cm)			測定・成型		色調	備考
				口径	高さ	底径	外面	内面		
70	土器層 3091	土師器	直	9.4	1.7	-	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	淡黃色	
71	土器層 3091	土師器	直	9.6	1.9	-	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	褐色	
72	土器層 3091	土師器	直	10.2	1.6	-	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	浅黃色	
73	土器層 3091	土師器	直	10.5	1.4	-	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	褐色	
74	土器層 3091	土師器	直	(14.4)	3.3	-	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	浅黃褐色	
75	土器層 3091	土師器	直	(14.6)	2.7	-	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	外：黑色 内：淺黃褐色	外面に煤付着
76	土器層 3091	須恵器	甕	-	[6.7]	17.0	ヨコナデ、オサエ ヨコナデ、タカキ	ヨコナデ、ナデ	灰色	
77	土器層 3091	須恵器	砵	(29.5)	10.0	(9.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	束縛系
78	羽釜埋納遺 構 3031	土師器	羽釜	24.0	20.1	-	ナデ	ナデ	外：黑褐色 内：にぶい黃褐色	
79	漢 2004	土師器	直	(9.0)	1.7	-	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	灰白色	
80	漢 2004	土師器	直	(9.6)	1.8	-	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	浅黃褐色	全体的に摩滅している
81	漢 2004	土師器	直	10.2	1.8	-	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	灰白色	
82	漢 2004	瓦質土器	羽釜	(19.7)	[3.7]	-	ヨコナデ、貼付ナデ	ヨコナデ、ナデ	暗灰色	
83	土取り坑 2003	瓦質土器	火舎	(27.6)	[6.4]	-	ヨコナデ、ハラミガキ	ヨコナデ、オサエ	灰白色	
84	土取り坑 2010	土師器	直	-	[0.9]	-	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	灰白色	
85	土取り坑 2010	土師器	直	(14.4)	2.9	-	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、ナデ	灰白色	
86	龜石 1008	瓦	軒丸瓦 高さ 12.0	瓦当高さ 12.0	瓦当幅 [8.0]	瓦当厚さ 2.3	型押し、ナデ	型押し、ナデ	外：反黄色	単蓮草文
87	土取り坑 2010	瓦	軒丸瓦 高さ (13.0)	瓦当高さ (13.0)	瓦当幅 [8.0]	瓦当厚さ 2.3	型押し	ナデ	外：反黃褐色	
88	ピット 2012	瓦	軒丸瓦 高さ [10.0]	高さ [10.0]	幅 12.8	長さ [7.7]	凸：ナデ	凸：ナデ 内：ハラミ ナデ	灰白色	三巴文
89	土器層 3061	瓦	軒平瓦 高さ 3.8	瓦当高さ 3.8	瓦当幅 [6.5]	瓦当厚さ 1.3	型押し、ハラミ ナデ 布目紋	凸：ハラミ ナデ 指サエ	黑色	唐草文
90	土塙 3053	瓦	軒平瓦 高さ 4.6	瓦当高さ 4.6	瓦当幅 [6.5]	瓦当厚さ 2.5	型押し、布目紋	凸：ナデ ハラミズリ	灰白色	格子文
91	包含層	土師器	直	9.0	1.9	-	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	外：灰白色 内：淺黃褐色	
92	包含層	土師器	直	9.4	1.6	-	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	灰白色	
93	包含層	土師器	直	(14.6)	2.6	-	ヨコナデ、オサエ	ヨコナデ、指サエ、ナデ	浅黃褐色	
94	包含層	山茶輪	碗	-	[2.9]	(12.5)	削出し高台	ロクロナデ	灰白色	尾張型 2型式 見込み と断面に赤色顔料
95	包含層	瓦器	小碗	7.2	2.9	4.2	ヘラミガキ、ナデ、ヨコナデ	ヘラミガキ	黑色	
96	包含層	輸入陶器	黄釉褐 彩盤	-	[2.2]	(26.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	外：浅黄色 内：明褐色	内面に戴の結
97	包含層	青磁	壺	-	[10.6]	(8.6)	ロクロナデ、削出し高台、施釉	ロクロナデ、施釉	灰オリーブ色	



# 写 真 図 版





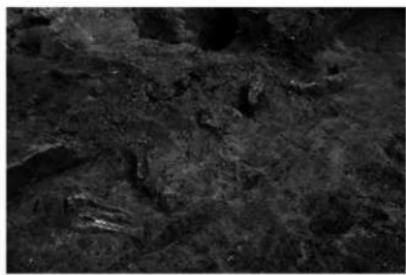
1. 自然流路 3002 完掘（南から）



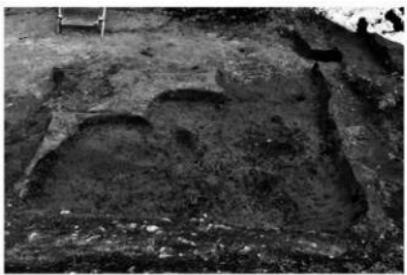
2. 自然流路 3002 完掘（北から）



1. 自然流路 3002、撓み 3078 完掘後全景（南から）



2. 自然流路 3002 獣骨出土状況（北西から）



3. 撥み 3078 完掘（西から）



1. 第II及びIII期全景（南から）



2. 第II及びIII期全景（北から）



1. 硬化面 3005 検出（南から）



2. 硬化面 3005・溝 2001 検出（南から）



3. 硬化面 3005 完掘及びピット列（南から）



4. 溝 3003 完掘（南から）



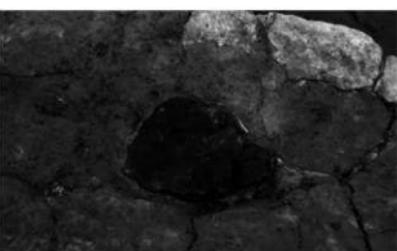
1. 溝 3003 (1 区) 完掘 (北から)



2. 溝 3003 (2 区) 完掘 (南から)



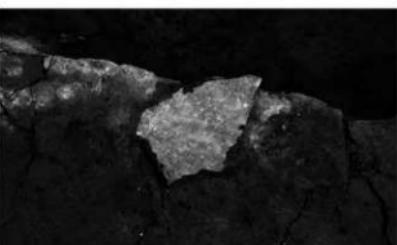
4. ピット 2016 (南から)



5. 磨石 3027 (南から)



3. 硬化面 2005 完掘 (南から)



6. 磨石 3028 (西から)



1. 磨敷き 3039、3040 検出（北から）



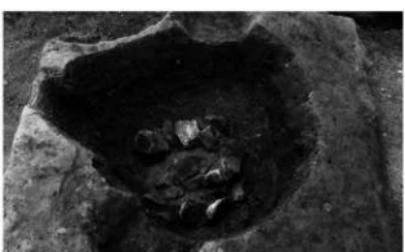
2. 集石 1008 検出（南から）



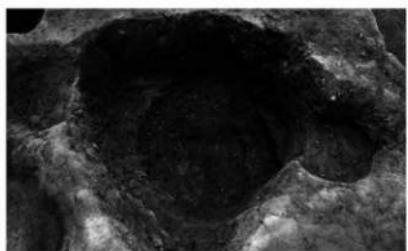
3. 土坑 3052 箱状木質検出（西から）



4. 土坑 3053 完掘（南から）



5. 土坑 3060 磨・遺物出土状況（北から）



6. 土坑 3060 完掘（東から）



7. 土坑 3060 北壁側板検出（南東から）



1. 土器窯 3001 遺物出土状況（東から）



2. 土器窯 3001 下層遺物出土状況（西から）



3. 羽釜埋納遺構 3031 遺物出土状況（東から）



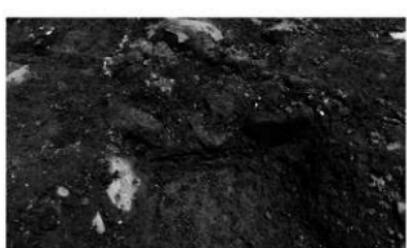
4. 羽釜埋納遺構 3031 断面（東から）



5. 土器窯 3001、羽釜埋納遺構 3031（北から）



6. 土取り坑 2010 完掘（南西から）



7. 近世溝断面（南から）



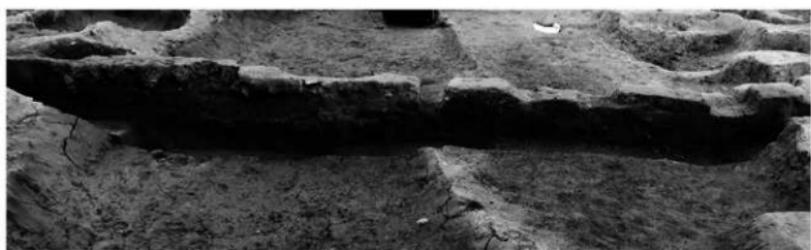
8. 第IV期全貌（南から）



1. ベルト 1 断面西（南から）



2. ベルト 1 断面東（南から）



3. ベルト 2 断面（南から）



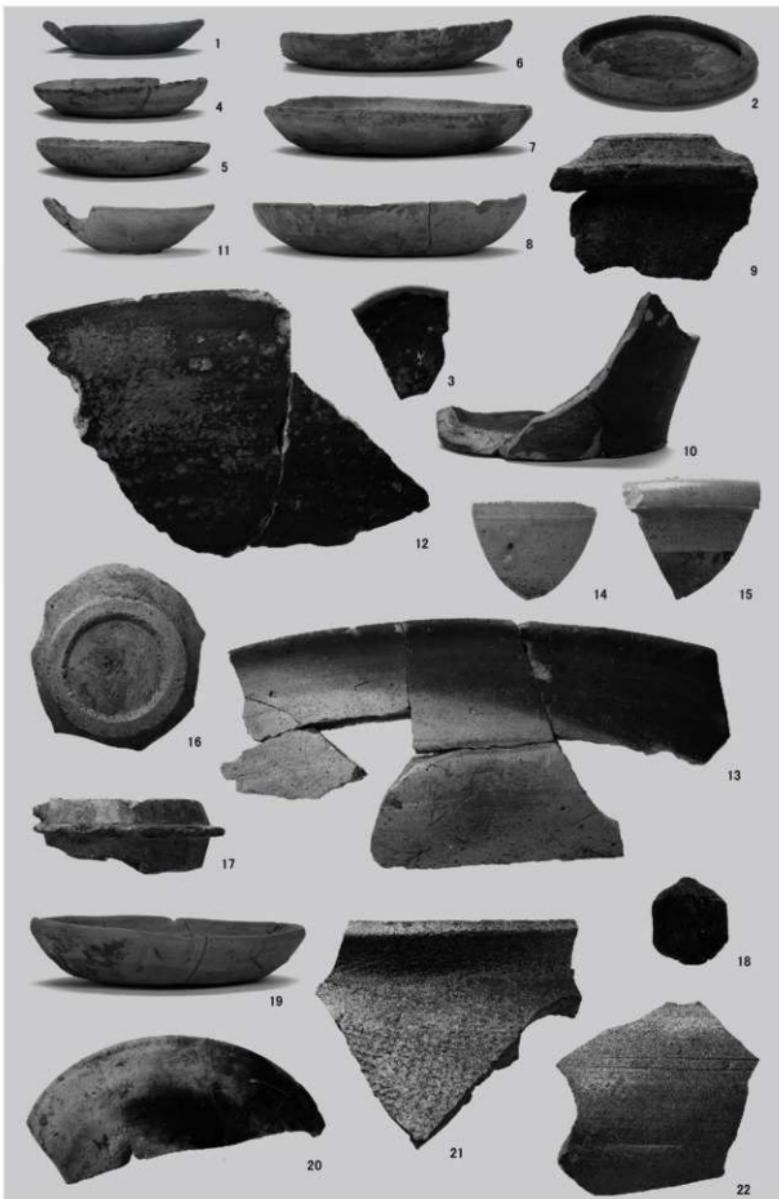
4. ベルト 2 断面西（南から）



5. ベルト 2 断面中央（南から）



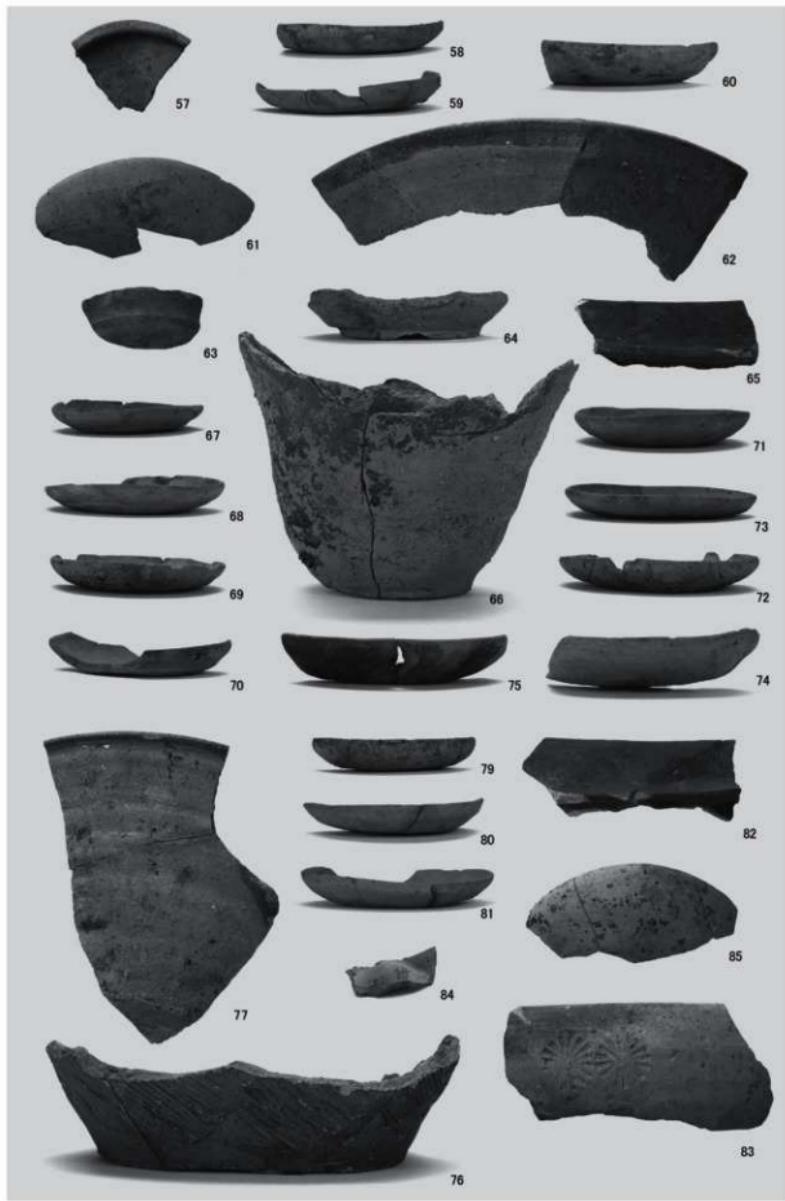
6. ベルト 2 断面東（南から）



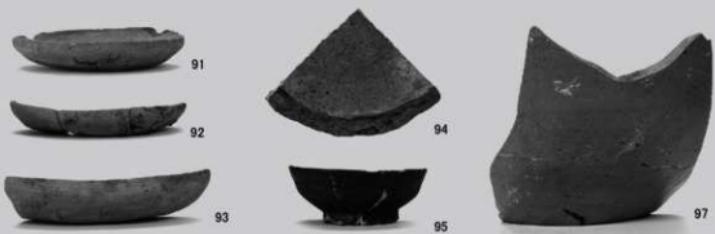
1. 出土遺物 I



1. 出土遺物 2



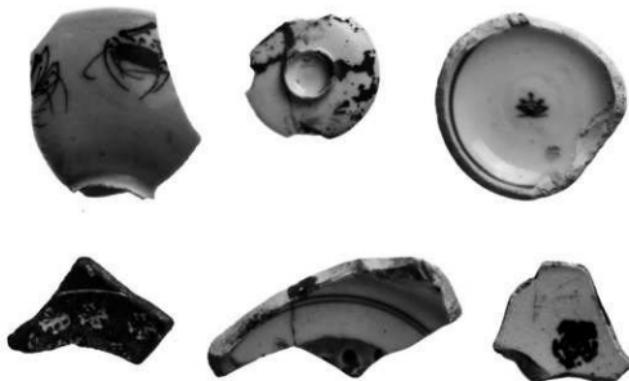
1. 出土遺物 3



1. 出土遺物 4



1. 第II期出土の瓦器（左：西一行北七門、右：西一行北八門）



2. 第IV期出土の陶磁器



## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうじょうしほうにちようあと・からすまちょういせき
書名	平安京左京九条四坊二町跡・烏丸町遺跡
副書名	東九条東山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	イビソク京都市内遺跡調査報告
シリーズ番号	第21輯
編著者名	熊谷洋一 田中芳樹 石井明日香
編集機関	株式会社イビソク
所在地	〒612-8425 京都府京都市伏見区竹田中殿町86番地 TEL 075-632-8109
発行年月日	2019年10月

所取遺跡名	所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡	京都府市南区東山王町6・8-2他	26107	1・759	34° 58'	135° 45'	20180618	357.5 m <sup>2</sup>	ホテル建設
				58"	40"	20181210		

所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡	都城跡 集落跡	平安時代～南北朝時代	自然流路、溝、土坑、硬化面、土器窯、羽釜埋納遺構	土器皿、瓦器、瓦質土器、瓦、陶磁器、木製品	
			近世	溝	陶磁器
要 約	平安時代中期～南北朝・室町時代・近世の土地利用の変遷を確認した。10世紀～11世紀後半ごろまでの遺物を伴う自然流路を確認した。11世紀後半～12世紀後半ごろの東洞院大路や築地基底部と考えられる硬化面、東洞院大路の東側側溝などを確認した。13世紀～14世紀には、土地利用は大きく変化し、徐々に耕地化してゆく。このころの遺構としては、土坑、土取り坑などが見られる。18世紀の遺物を伴う暗渠と思われる溝を確認した。				



平安京左京九条四坊二町跡・烏丸町遺跡

—東九条東山王町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2019年10月

編集  
発行 株式会社イビソク

住所 京都府京都市伏見区竹田田中殿町86番地  
〒612-8425 TEL 075-632-8109

印刷 富士出版印刷株式会社

